長野市の埋蔵文化財第77集

浅川扇状地遺跡群

松ノ木田遺跡

――長野県長野高等学校第２グランド造成地点――

1996・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ貴重な国民的財産であると考えます。

歴史は単なる時間の流れの集積ではなく、私たちの先祖の長い間の知恵と文化の集積であります。特に埋蔵文化財は先人たちの文化を伝えるだけではなく、現代の文化の在り方を見つめ直す上でも鍵となる貴重な国民の共有財産であります。

このたび、長野県長野高等学校第二グランド造成事業に伴い、浅川扇状地遺跡群松ノ木田遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は、過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財第77集」として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行に至るまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成８年３月

長野市教育委員会教育長　滝澤忠男

例　　言

1　本書は、長野県長野高等学校第二グランド造成事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は、長野県土地開発公社理事長と長野市長との埋蔵文化財発掘調査委託契約書に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として行った。発掘調査は平成6年3月3日から6月30日に実施し、調査面積は約3,800㎡である。

3　調査地は、長野市浅川東条314－1他に位置する。本遺跡は浅川扇状地遺跡群の範囲内に存在する。今回の調査でその存在が確認された新発見の遺跡である。本報告にあたっては、遺跡の主要部分が存在する字名から浅川扇状地遺跡群松ノ木田遺跡として報告するものである。

4　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。

5　本書は、調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

・　資料は検出されたものの中から、時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。ただし、特殊なものはこの限りではない。時期・性格等不明瞭なものは資料掲載の対象からはずしたが、これらに関しては図面・出土遺物等閲覧し得るよう保管してある。

・　遺構番号は調査時に用いた仮番号を、報告にあたって再整理している。また、すべての遺構を掲載しているわけではないので必ずしも通し番号にはなっていない。

・　遺構の測量は、株式会社写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に1：80の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。

・　遺物実測図に関しては基本的に土器1：4、土器拓影1：3に統一してあるが、その他のものについては、適宜縮尺を明記してある。

・　本文ならびに写真図版において遺物番号を○―×と表記したものがある。○は図版番号、×は遺物番号である。

6　本文の執筆担当は以下のとおりである。

千野　浩（調査主任）　第1章、第2章、第3章第1節・第2節（住居址）
山下大輔（調査員）　第3章第2節（土壙）、第4章第1節・第4節（実測図等共）
鵜田典昭（㈱長野県埋蔵文化財センター）　第4章第2節（実測図等共）
川崎　保（㈱長野県埋蔵文化財センター）　第4章第3節（実測図等共）

目　次

序
例　言
目　次

第1章　調査経過……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査の体制……2

第2章　調査地周辺の考古学的環境……5

第3章　調　　査……7
　第1節　遺構の分布……7
　第2節　遺構と遺物……12
　　住居址……12
　　土　壙……82

第4章　出土遺物の様相……111
　第1節　土器の様相……111
　第2節　石器の様相……124
　第3節　装身具類の様相……153
　第4節　土偶・土製品の様相……158

報告書抄録
奥　付

挿 図 目 次

図１　調査地位置図 …… 4
図２　調査地周辺遺跡分布図 …… 6
図３　調査地と松ノ木田遺跡想定図 …… 7
図４　遺構分布図 …… 8
図５　調査区南遺構分布図 …… 9
図６　調査地北遺構分布図① …… 10
図７　調査区北遺構分布図② …… 11
図８　第１号住居址実測図 …… 12
図９　第１号住居址出土土器実測図 …… 13
図１０　第１号住居址出土土器拓影① …… 13
図１１　第１号住居址出土土器拓影② …… 14
図１２　第１号住居址出土土器拓影③ …… 15
図１３　第２号住居址実測図 …… 16
図１４　第２号住居址出土土器拓影 …… 16
図１５　第３号住居址実測図 …… 17
図１６　第３号住居址出土土器実測図 …… 18
図１７　第３号住居址出土土器拓影① …… 18
図１８　第３号住居址出土土器拓影② …… 19
図１９　第３号住居址出土土器拓影③ …… 20
図２０　第３号住居址出土土器拓影④ …… 21
図２１　第３号住居址出土土器拓影⑤ …… 22
図２２　第３号住居址出土土器拓影⑥ …… 23
図２３　第４号住居址実測図 …… 23
図２４　第４号住居址出土土器拓影 …… 23
図２５　第５号(外)・第６号(内)住居址実測図‥ 24
図２６　第５号住居址出土土器実測図 …… 25
図２７　第５号住居址出土土器拓影① …… 26
図２８　第５号住居址出土土器拓影② …… 27
図２９　第５号住居址出土土器拓影③ …… 28
図３０　第５号住居址出土土器拓影④ …… 29
図３１　第５号住居址出土土器拓影⑤ …… 30
図３２　第６号住居址出土土器実測図 …… 31
図３３　第６号住居址出土土器拓影① …… 31
図３４　第６号住居址出土土器拓影② …… 32
図３５　第６号住居址出土土器拓影③ …… 33
図３６　第６号住居址出土土器拓影④ …… 34
図３７　第６号住居址出土土器拓影⑤ …… 35
図３８　第７号住居址実測図 …… 36
図３９　第７号住居址出土土器拓影① …… 37
図４０　第７号住居址出土土器拓影② …… 38
図４１　第７号住居址出土土器拓影③ …… 39
図４２　第７号住居址出土土器拓影④ …… 40
図４３　第７号住居址出土土器拓影⑤ …… 41
図４４　第８号住居址出土土器拓影⑥ …… 41
図４５　第８号住居址出土土器拓影 …… 42
図４６　第９号住居址実測図 …… 43
図４７　第９号住居址出土土器実測図 …… 44
図４８　第９号住居址出土土器拓影 …… 45
図４９　第10号住居址実測図 …… 46
図５０　第10号住居址出土土器実測図
ならびに出土土器拓影① …… 47
図５１　第10号住居址出土土器実測図
ならびに出土土器拓影② …… 48
図５２　第10号住居址出土土器拓影③ …… 49
図５３　第10号住居址出土土器拓影④ …… 50
図５４　第10号住居址出土土器拓影⑤ …… 51
図５５　第10号住居址出土土器拓影⑥ …… 52
図５６　第10号住居址出土土器拓影⑦ …… 53
図５７　第10号住居址出土土器拓影⑧ …… 54
図５８　第11号住居址実測図 …… 55
図５９　第11号住居址出土土器実測図 …… 56
図６０　第11号住居址出土土器拓影① …… 57
図６１　第11号住居址出土土器拓影② …… 58
図６２　第11号住居址出土土器拓影③ …… 59

図６３　第 11 号住居址出土土器拓影④ …… 60
図６４　第 12 号住居址実測図 …… 61
図６５　第 12 号住居址出土土器拓影① …… 62
図６６　第 12 号住居址出土土器拓影② …… 63
図６７　第 13 号住居址実測図 …… 64
図６８　第 13 号住居址出土土器実測図 …… 65
図６９　第 13 号住居址出土土器拓影① …… 66
図７０　第 13 号住居址出土土器拓影② …… 67
図７１　第 14 号住居址実測図 …… 68
図７２　第 14 号住居址出土土器実測図 …… 68
図７３　第 14 号住居址出土土器拓影① …… 69
図７４　第 14 号住居址出土土器拓影② …… 70
図７５　第 14 号住居址出土土器拓影③ …… 71
図７６　第 15 号住居址出土土器実測図 …… 72
図７７　第 15 号住居址出土土器拓影① …… 73
図７８　第 17 号住居址出土土器拓影 …… 74
図７９　第 17 号住居址実測図 …… 75
図８０　第 19 号住居址実測図 …… 76
図８１　第 19 号住居址出土土器拓影① …… 77
図８２　第 19 号住居址出土土器拓影② …… 78
図８３　第 20 号住居址実測図 …… 79
図８４　第 20 号住居址出土土器拓影① …… 79
図８５　第 20 号住居址出土土器拓影② …… 80
図８６　第 20 号住居址出土土器拓影③ …… 81
図８７　第 1 号土壙実測図
　　ならびに出土土器拓影…… 82
図８８　第 2 号実測図 …… 83
図８９　第 4 号土壙実測図 …… 83
図９０　第 5 号土壙実測図 …… 84
図９１　第 6 号土壙実測図
　　ならびに出土土器拓影①…… 84
図９２　第 6 号土壙出土土器拓影② …… 85
図９３　第 7 号土壙実測図･出土土器実測図
　　ならびに出土土器拓影①…… 85
図９４　第 7 号土壙出土土器拓影② …… 86
図９５　第 7 号土壙出土土器拓影③ …… 87
図９６　第 8 号土壙実測図
　　ならびに出土土器拓影…… 87
図９７　第 9 号土壙実測図
　　ならびに出土土器拓影…… 88
図９８　第 10 土壙実測図･出土土器実測図
　　ならびに出土土器拓影①…… 88
図９９　第 10 号土壙出土土器実測図
　　ならびに出土土器拓影②…… 89
図 100　第 12 号土壙実測図
　　ならびに出土土器拓影…… 90
図 101　第 13 号土壙実測図･出土土器実測図
　　ならびに出土土器拓影…… 90
図 102　第 14 号土壙実測図･出土土器実測図
　　ならびに出土土器拓影…… 91
図 103　第 15 号土壙実測図
　　ならびに出土土器拓影①…… 91
図 104　第 15 号土壙出土土器拓影② …… 92
図 105　第 16号土壙実測図ならびに出土土器拓影 92
図 106　第 18号土壙実測図ならびに出土土器拓影 93
図 107　第 19 号土壙実測図…… 93
図 108　第 19 号土壙出土土器拓影…… 94
図 109　第 20 号土壙実測図…… 95
図 110　第 21 号土壙実測図
　　ならびに出土土器拓影①…… 95
図 111　第 21 号土壙出土土器拓影② …… 96
図 112　第 22 号土壙実測図
　　ならびに出土土器拓影①…… 96
図 113　第 22 号土壙出土土器拓影② …… 97

図114　第23号土壙実測図ならびに出土土器拓影97
図115　第24号土壙実測図ならびに出土土器拓影98
図116　第25号土壙実測図ならびに出土土器拓影98
図117　第26号土壙実測図・出土土器実測図
ならびに出土土器拓影…… 99
図118　第27号土壙実測図…… 99
図119　第27号土壙出土土器拓影…… 100
図120　第30号土壙実測図
ならびに出土土器拓影…… 101
図121　第31号土壙実測図・出土土器実測図
ならびに出土土器拓影…… 101
図122　第32号土坑実測図…… 101
図123　第32号土壙出土土器拓影…… 102
図124　第33号土壙実測図…… 103
図125　第34号土壙実測図…… 103
図126　第34号土壙出土土器実測図
ならびに出土土器拓影…… 104
図127　第35号土壙実測図
ならびに出土土器拓影…… 104
図128　第37号土壙実測図・出土土器実測図
ならびに出土土器拓影…… 105
図129　第41号土壙実測図・出土土器実測図
ならびに出土土器拓影①…… 106
図130　第41号土壙出土土器実測図
ならびに出土土器拓影②…… 107
図131　第42号土壙実測図
ならびに出土土器拓影…… 107
図132　第43号土壙実測図
ならびに出土土器拓影①…… 108
図133　第43号土壙出土土器実測図
ならびに出土土器拓影②…… 109
図134　第48号土壙実測図
ならびに出土土器拓影①…… 109
図135　第48号土壙出土土器拓影②…… 110
図136　第49号土壙実測図
ならびに出土土器拓影…… 110
図137　第52号土壙実測図
ならびに出土土器拓影…… 110
図138　装身具類実測図①…… 155
図139　装身具類実測図②…… 156
図140　土偶・土製品実測図…… 159

第1章　調査経過

第1節　調査に至る経過

長野市北部に位置する浅川東条地籍は、南緑を飯綱山麓に発する浅川が流下し、主要地方道長野信濃線が中央部を南北に通過し、これから分岐した県道飯綱高原浅川線が浅川に沿って北西に向かう。リンゴ栽培と稲作中心の農業地域であるが、隣接地に大規模な団地が存在し、当地域内にも住宅や商店が増加しつつある。

平成５年、長野県教育委員会ならびに長野高等学校は、広大な水田地帯として残されていた浅川小学校南面に、事業面積約5,400㎡におよぶ長野高等学校第２グランドの造成を計画した。

事業予定地周辺は、周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置するものの、過去における調査事例が少なく、埋蔵文化財の包蔵の可能性はきわめて不明瞭なものであった。

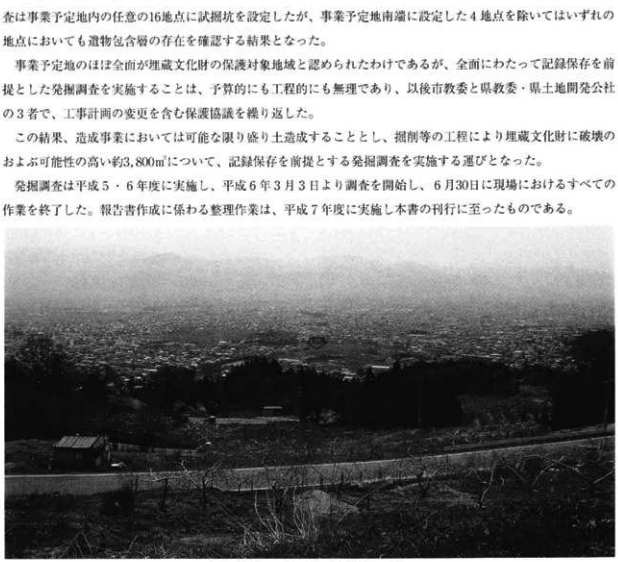
よって長野市教育委員会は、県教育委員会の委託を受け、事前に埋蔵文化財の存在の有無を確認するための試掘調査を実施した。

試掘調査は用地買収の進捗状況に合わせて、平成５年７月１日、11月１日・２日の２回に分けて実施した。調査は事業予定地内の任意の16地点に試掘坑を設定したが、事業予定地南端に設定した４地点を除いてはいずれの地点においても遺物包含層の存在を確認する結果となった。

事業予定地のほぼ全面が埋蔵文化財の保護対象地域と認められたわけであるが、全面にわたって記録保存を前提とした発掘調査を実施することは、予算的にも工程的にも無理であり、以後市教委と県教委・県土地開発公社の３者で、工事計画の変更を含む保護協議を繰り返した。

この結果、造成事業においては可能な限り盛り土造成することとし、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊のおよぶ可能性の高い約3,800㎡について、記録保存を前提とする発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査は平成５・６年度に実施し、平成６年３月３日より調査を開始し、６月30日に現場におけるすべての作業を終了した。報告書作成に係わる整理作業は、平成７年度に実施し本書の刊行に至ったものである。



調査地遠景（中央盛り土部分が調査地）

第2節　調査の体制

(1)　平成5年度の調査

調査主体者	長野市教育委員会	教育長　滝澤忠男
総括責任者	市埋蔵文化財センター	所　長　荒井和雄
庶務係	〃	所長補佐　山中武徳
	〃	職　員　青木厚子
調査係	〃	所長補佐　矢口忠良
	〃	主　査　青木和明
	〃	主　事　千野　浩
	〃	主　事　飯島哲也
	〃	専門主事　羽場卓雄
	〃	専門主事　太田重成
	〃	専門員　中殿章子
	〃	専門員　横山かよ子
	〃	専門員　寺島孝典
	〃	専門員　笠井敦子
	〃	専門員　山田美弥子
	〃	専門員　西沢真弓

調査参加者

金子ゆき　吉沢トシ子　成田敦子　新津三千子　佐藤ひで子　宮沢けさよ　小林さと　小林志げる　横山ふぢ江　宮沢芳美　佐藤君江　佐藤はま　佐藤幸子　中山やす子　神頭幸雄　美谷島昇　原汪子　宮島静美　小林三郎　祖山和子　中澤秀子　成田とよみ　島田みち子　柳澤松枝　赤塩園　鶴田己幸　金子千春　木内真紀子　大畑真弓　徳嵩仁

(2)　平成6年度の調査

調査主体者	長野市教育委員会	教育長　滝澤忠男
総括責任者	市埋蔵文化財センター	所　長　荒井和雄
	〃	主　幹　鈴木貞男
庶務係	〃	所長補佐　山中武徳
	〃	職　員　青木厚子
調査係	〃	所長補佐　矢口忠良
	〃	主　査　青木和明
	〃	主　事　千野　浩
	〃	主　事　飯島哲也
調査係	市埋蔵文化財センター	主　事　風間栄一
	〃	主　事　小林和子
	〃	専門主事　太田重成
	〃	専門主事　清水　武
	〃	専門員　中殿章子
	〃	専門員　西沢真弓
	〃	専門員　寺島孝典
	〃	専門員　笠井敦子
	〃	専門員　山田美弥子
	〃	専門員　田村直也
	〃	専門員　田中由美子
	〃	事務員　塚田容子

調査参加者

美谷島昇　横川甚三　神頭幸雄　横山ふぢ江　佐藤幸子　佐藤君江　成田とよみ　佐藤はま　小林志げる　宮沢芳美　高島けい子　和田善美　岡本重子　鎌田晴子　新保聖子　白石章子　北原京子　久保田光子　宮村春子　緑川千代子　田野口房子　藤井陽子　石坂あや子　鹿熊正子　宮沢けさよ　金井由美　小林さと　宮島静美　西原美雪　成田喜志子　柳澤松枝　北村幸恵　鈴木友江　小林紀代美　佐藤ひで子　吉沢トシ子　新津三千子　成田敦子　金子ゆき　小林三郎　中村恭子　中嶋みち子　中澤秀子　祖山和子　水内すみ子　山崎たつ江　加我恵子　増田洋子　斉藤泰子　上野順子　黒澤祥子　赤塩園　酒衛和美　立岡美代子　村田愛子　田中怜子　百瀬理恵子　召田恵子　寺沢直美　田中千恵子　吉沢ムツ子　小林敏江　中山智恵子　向山純子　西尾千枝　山崎洋子　佐々木慶子　宮原孝子　古越育子　中山やす子　原汪子　島田みち子　鶴田己幸　金子千春　徳嵩仁　徳永勝子

整理作業参加者

西尾千枝　向山純子　岡沢治子　徳成奈於子　池田見紀　小泉ひろ美　峯村孝一　宮原千治　高橋薫　佐々木慶子　山崎洋子　武藤信子　宮原孝子　宮島静美

(3) 平成7年度の調査

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤忠男
総括責任者	市埋蔵文化財センター	所長	丸田修三
庶務係	〃	所長補佐	小林重夫
	〃	職員	青木厚子
調査係	〃	所長補佐	矢口忠良
	〃	主査	青木和明
	〃	主事	千野浩
	〃	主事	飯島哲也
	〃	主事	風間栄一
	〃	主事	小林和子
	〃	専門主事	清水武
	〃	専門員	中殿章子
	〃	専門員	西沢真弓
	〃	専門員	寺島孝典
	〃	専門員	山田美弥子
	〃	専門員	小野由美子
	〃	専門員	堀内健次
	〃	専門員	藤田隆之
	〃	事務員	塚田容子

整理作業参加者

向山純子　西尾千枝　岡沢治子　徳成奈於子　池田見紀

執筆参加者

鵜田典昭（㈱長野県埋蔵文化財センター）

川崎　保（㈱長野県埋蔵文化財センター）

山下大輔

遺構測量委託　有限会社写真測図研究所

足掛け3年にわたる調査の中で、多くの方々のご支援・ご助力をいただいている。事業主体者の長野県土地開発公社・長野県教育委員会高校教育課・長野高等学校におかれては埋蔵文化財保護に対して深くご理解頂きご協力を賜った。施工業者の北信土建株式会社には現地調査の便宜をその都度はかっていただき、安全管理面でもご配意いただいた。また長野県教育委員会文化課・㈱長野県埋蔵文化財センター諸氏から保護および調査内容について多角的にご指導いただいた。厚く御礼申し上げます。

図１　調査地位置図（１：20,000）

第２章　調査地周辺の考古学的環境

飯綱山を水源とする浅川は山間部を浸食流下した後、浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度1/45を計測する典型的な扇状地を形成する。この扇状地上には多くの遺跡が存在し、長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。以下浅川扇状地遺跡群の代表的な遺跡について概説し、周辺の考古学的環境としたい。

旧石器時代は、浅川源流に近い猫又池・大池に遺跡が確認されているが、扇状地上にはその存在は確認されていない。

縄文時代には湯谷・赤萱平・苅田・牟礼バイパスＡ地点・徳間榎田・浅川端・松ノ木田の各遺跡が確認されている。これらはともに駒沢川と浅川流域に集中する傾向が認められ、正式調査を受けた遺跡としては前者に牟礼バイパスＡ地点遺跡、後者に浅川端遺跡が存在する。牟礼バイパスＡ地点遺跡では縄文時代前期前葉の住居址１軒が、浅川端遺跡では同じく前期前葉の住居址１軒・土壙１基が検出されている。いずれにせよ、旧石器時代同様、縄文時代の遺跡も現状では調査例が僅少で、詳細は今後の調査にゆだねざるを得ない。

弥生時代には徳間柳田遺跡・二ツ宮遺跡・本堀遺跡・牟礼バイパスＤ地点遺跡・浅川端遺跡・神楽橋遺跡・吉田高校グランド遺跡・本村東沖遺跡等がある。徳間柳田遺跡・本堀遺跡・牟礼バイパスＤ地点遺跡・浅川端遺跡では主として弥生時代中期の栗林式期の遺構が検出されており、神楽橋遺跡・吉田高校グランド遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡では弥生時代後期の吉田式・箱清水式期の遺構が検出されている。中でも吉田高校グランド遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡ではそれぞれ時期的に継続する単一集落が検出されており、当該期の集落研究に良好な資料を提供している。また、本村東沖遺跡では比較的多量の北陸系土器が出土しており、当該期の複雑な地域間交流の一端を示している。

古墳時代に入り浅川扇状地遺跡群を特徴づけるのは古墳時代中期における集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスＢ地点遺跡・下宇木遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡など良好な集落遺跡の検出例が増えてきており、その集中度は善光寺平の中でも特異といいうる。中でも本村東沖遺跡では五世紀中葉から六世紀初頭にかけての住居址56軒を検出している。陶邑編年Ｉ型式２段階から４段階に対応すると考えられる古式の須恵器が比較的多量に出土し、多量の石製模造品を出土するなど製作工人に関連する可能性が高い住居址が存在する。また、子持ち勾玉・土鈴など特殊な祭祀遺物を出土する住居址が存在するなど当該期の中核的集落であった可能性が高い。その立地をあわせ考えるならば、犀川以北の当該期の盟主的な古墳群である地附山古墳群と本村東沖遺跡との関連を想定することは容易であり、この遺跡が地附山古墳群の造営に直接関わった集落として理解することもあながち根拠のないことではなかろう。

古墳時代後期～平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡・牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点遺跡・三輪遺跡・二ツ宮遺跡などが代表的な遺跡といえよう。ただし大規模集落が長期間にわたって同一箇所に継続するのではなく、時期毎に立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。

三才田子遺跡は数棟の掘建柱建物址や円面硯の出土などから東山道多古駅もしくは何らかの官衙址と推定されている。また稲添遺跡では瓦塔が、二ツ宮遺跡では鴟尾破片が出土しており、善光寺平における初期仏教関連の遺物として注目されている。また牟礼バイパスＣ地点遺跡や牟礼バイパスＤ地点遺跡ではいわゆる善光寺瓦が出土しており、善光寺の創建時期をめぐる諸問題の解決に貴重な資料を提供している。

平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうちの吉田牧がもうけられており、駒弓・桐原牧神社などはその名残と考えられ、広大な扇状地は好適な放牧地であったと考えられる。

図２　調査地周辺遺跡分布図（１：20,000）

１松ノ木田　２赤萱平　３浅川西条　４牟礼バイパスＡ　５牟礼バイパスＢ　６牟礼バイパスＣ
７牟礼バイパスＤ　８椋田　９神楽橋　10稲添　11能間柳田　12本堀　13二ツ宮　14湯谷古墳群
15浅川端　16押鐘　17盛伝寺居館跡　18本村東沖　19吉田高校グランド　20押鐘城跡　21下宇木
22相ノ木城跡　23～25三輪

第3章　調　　査

第1節　遺構の分布

試掘調査の結果、開発事業予定地のほぼ全面に遺跡が展開しているものと予想される。しかし、予算的および工期的にも全面調査が困難であり、保護協議によりできる限り盛土工法にて遺跡の保護・保存を図ることにした。そのため切り土等の掘削を伴う地域のみ記録保存の対象にした。

遺構の分布は混礫砂利堆積帯により南北に二分される。この堆積帯には数基の土壙が認められるが、明らかにこの部位を居住域から避けている。縄文時代前期後半と中期後半の二時期の遺構がみとめられるが、南側の方が遺構密集度が高い。また、北側の遺構の展開状況から標高の高い西側に集落が展開しているものと思われる。

今回の調査で住居址19軒を検出した。この内17軒が縄文時代前期後半に編年される諸磯ｂ式期に属するものである。ただし、炉等の施設が明瞭に確認できたものは第７号住居址以外になく、中には竪穴状遺構と称されるものが含まれている可能性もある。当該期土壙も多数検出されており、小穴の多くも同時期に所属するものと思われる。中期後半の住居址は２軒確認されており、第９号住居址は小型のものであるが石囲炉を有し、敷石が施されている。この期の土壙もこの住居址周辺にみられる。

ちなみに過去における試掘調査や飯綱高原浅川線道路改良事業に伴う発掘調査（平成７年度調査地）の結果、松ノ木田遺跡の想定範囲を示したのが図３である。扇状地扇頂部から今回の調査地東側にかけ帯状に展開するものと想定され、東西約415m・南北中央約130mの規模を予想する。

図３　調査地と松ノ木田遺跡想定図（１：3,500）

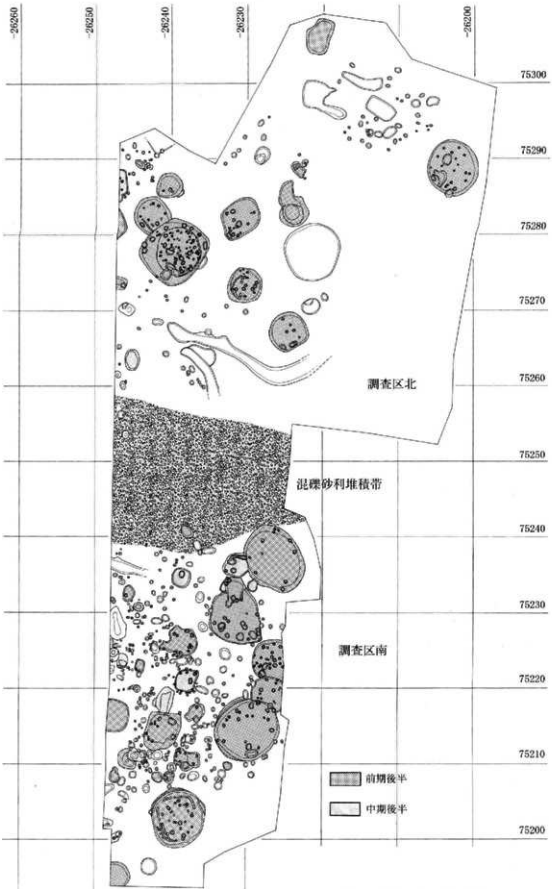


図4　遺構分布図（1：500）

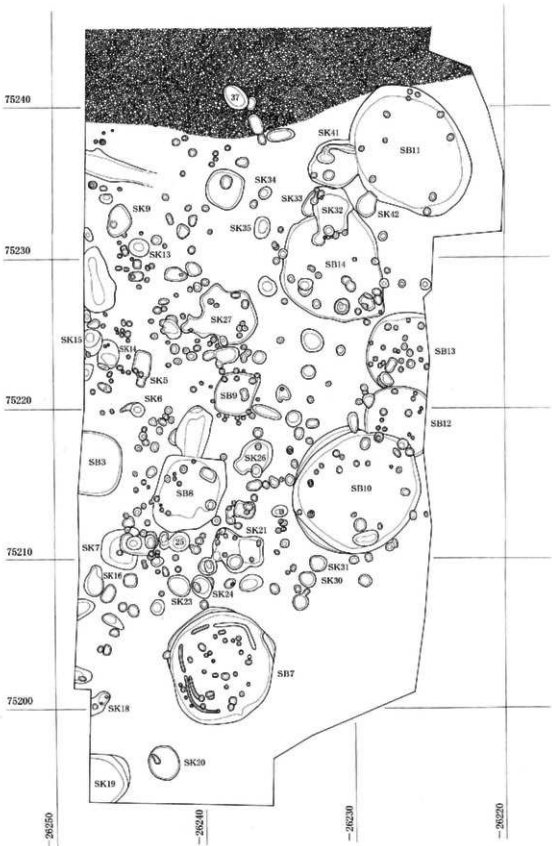


図5　調査区南遺構分布図（1：250）

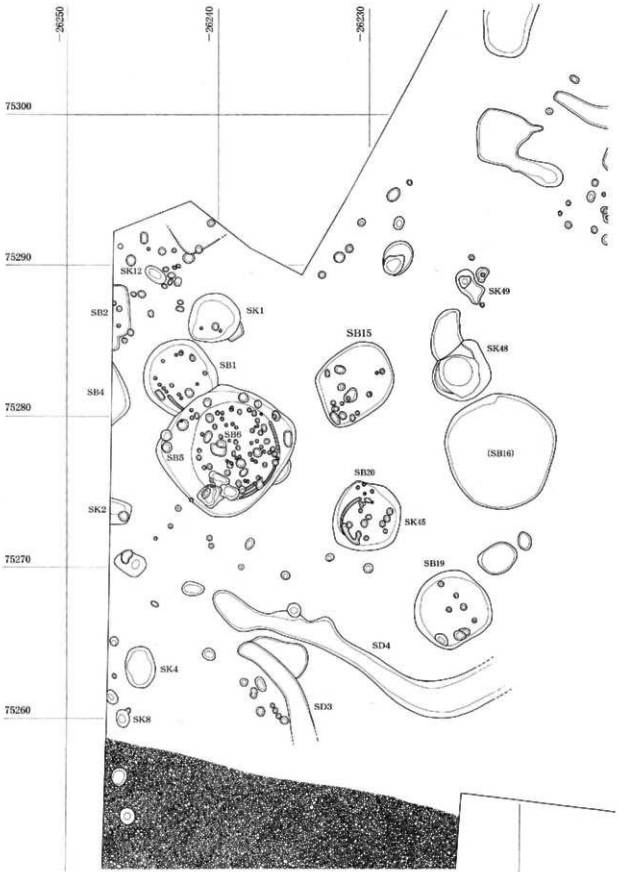


図6　調査地北遺構分布図①（1：250）

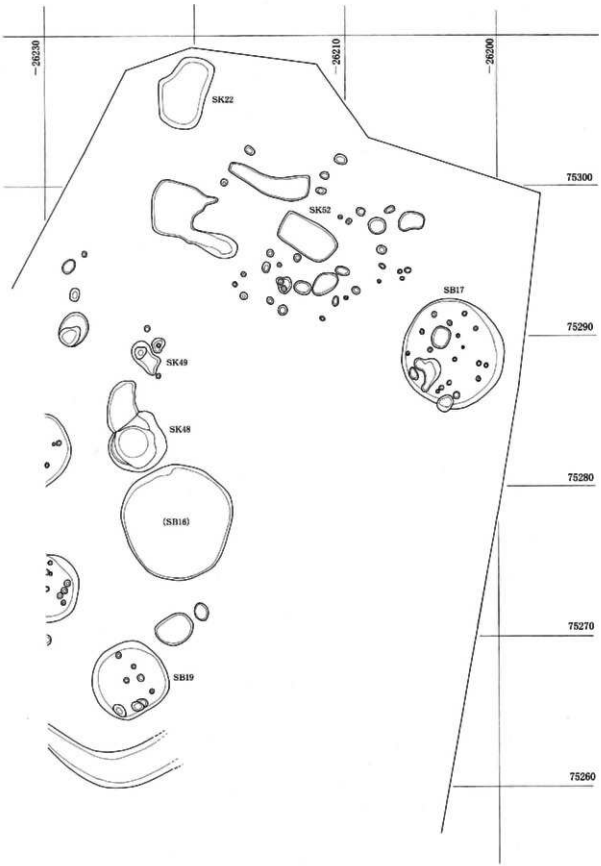


図7　調査区北遺構分布図②（1：250）

第２節　遺構と遺物

第１号住居址（図８～12）

調査区北端にて検出された住居址で、南側は第５・６号住居址に破壊される。

主軸長4.80mほどのやや不整な円形住居址で、確認面からの掘り込みは平均60cmと深くしっかりしたものである。P_1～P_{11}が主柱穴と考えられるもので、やや不整な同心円状の柱穴配置となる。床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。住居址中央付近床面下に円形の落ち込みが認められたが、炉等は検出されていない。

出土土器は深鉢３個体・浅鉢２個体が図化し得た。また覆土上層より玦状耳飾１点、床面直上より磨製石斧１点・打製石鏃１点を検出している。

出土土器の様相よりすれば、本住居址は縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と想定される。

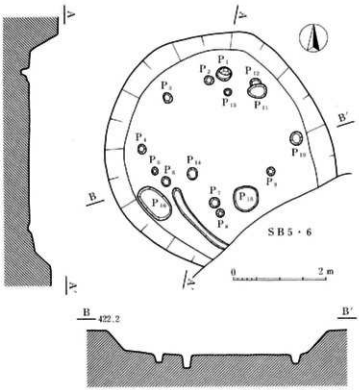


図８　第１号住居址実測図（１：80）

第１号住居址

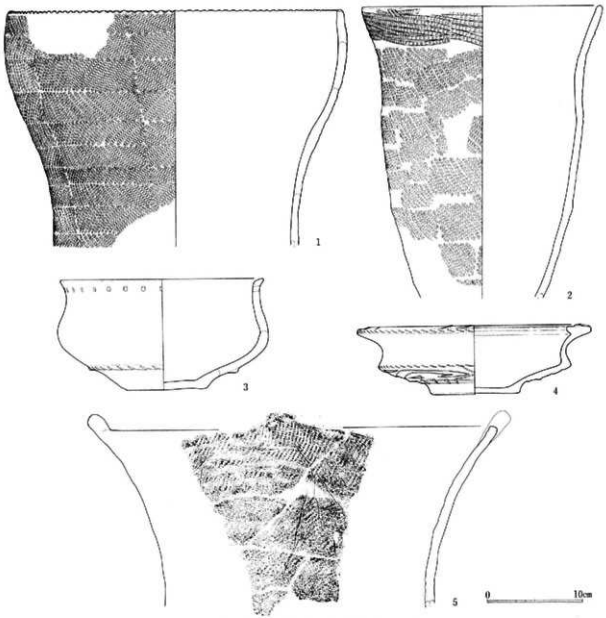


図9　第1号住居址出土土器実測図（1：4）

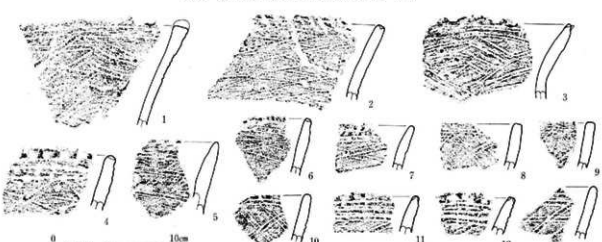


図10　第1号住居址出土土器拓影①（1：3）

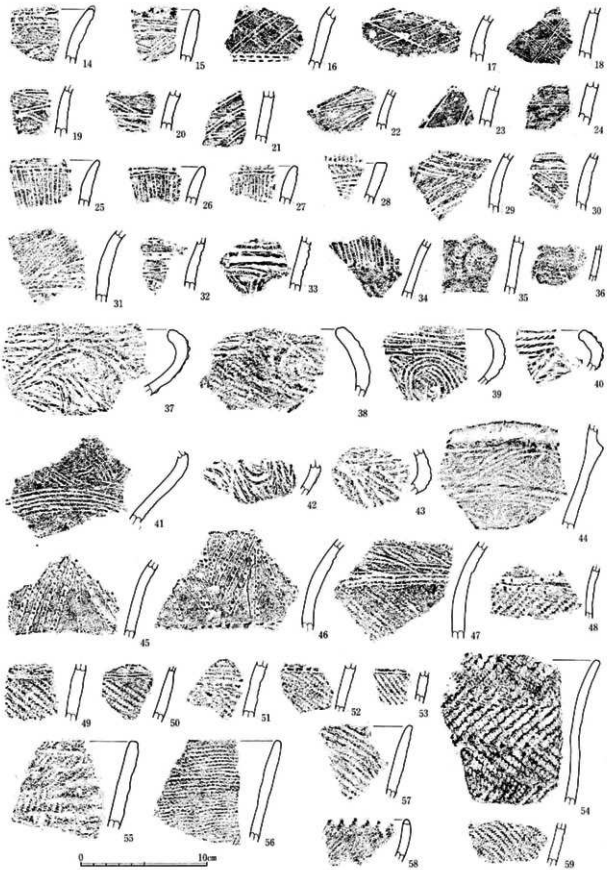


図11　第1号住居址出土土器拓影②（1：3）

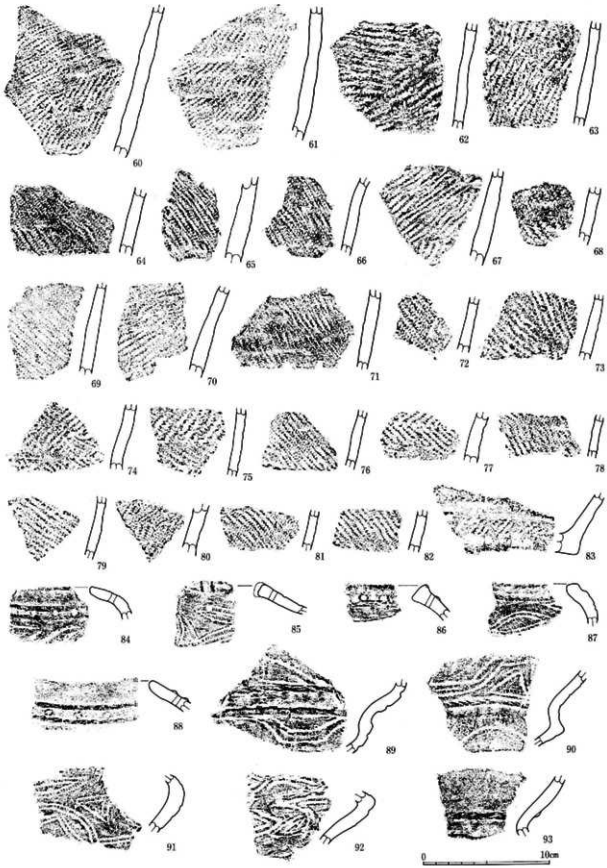


図12　第１号住居址出土土器拓影③（１：３）

第２号住居址（図13・14）

調査区北西端にて検出された住居址で、西側は大半が調査区外となり詳細は不明な部分が多い。

平面プランは一辺3.40mほどの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すものと予想され、確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅い。

床面は全体に軟弱で不明瞭なものであり、北東隅は下層の礫層を掘り込んでいる。柱穴はP_1～P_3を検出しているが、主柱穴として把握しうるものではない。炉等そのほかの施設は確認されておらず、住居址とする積極的な根拠は存在しない。

図示した土器は床面付近より出土したもので、いずれも同一個体と考えられるものである。図示した土器以外の遺物は出土していない。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代中期後葉加曽利Ｅ式期の所産と考えられる。

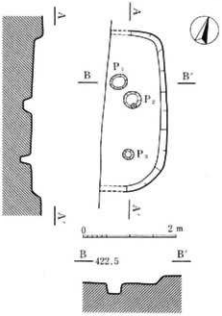


図13　第２号住居址実測図（１：80）

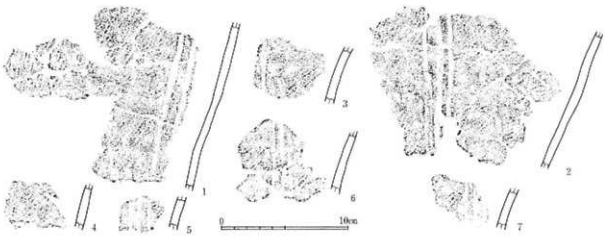


図14　第２号住居址出土土器拓影（１：３）

第２号住居址

第３号住居址（図15～22）

調査区南西にて検出された住居址で、西側1/3ほどが調査区外となる。他遺構との切り合い関係はない。

平面プランは径2.10mほどの隅丸方形に近い形態の円形を呈する。

確認面からの掘り込みは、壁際は平均15cm前後と浅くなだらかであるが、住居址中央部分は30cmほどと、この部分のみ顕著に落ち込む。床面は下層の礫層を掘り込んでおり、非常に不明瞭で軟弱なものである。柱穴は不明瞭ながらP_1～P_3の３本を検出したが、掘り込み規模も貧弱で主柱穴とは判断しかねる。炉等その他の施設は確認されていない。

住居址中央付近の覆土下層に、円礫と土器が住居廃絶後に投棄されたような状況で検出されており、またこの中から玦状耳飾破片が３点出土している。図示した土器の大半もこの中より出土している。

特殊な遺物として上述の玦状耳飾破片３点が出土している他、石皿１点・打製石鏃５点が出土している。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と考えられる。

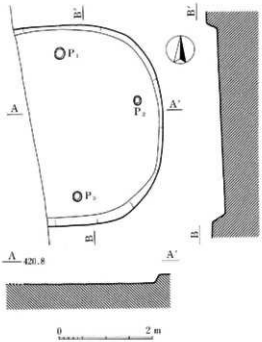


図15　第３号住居址実測図（１：80）

覆土堆積状況（３号住）

玦状耳飾破片出土状況（３号住）

円礫・土器投棄状況（３号住）

第３号住居址

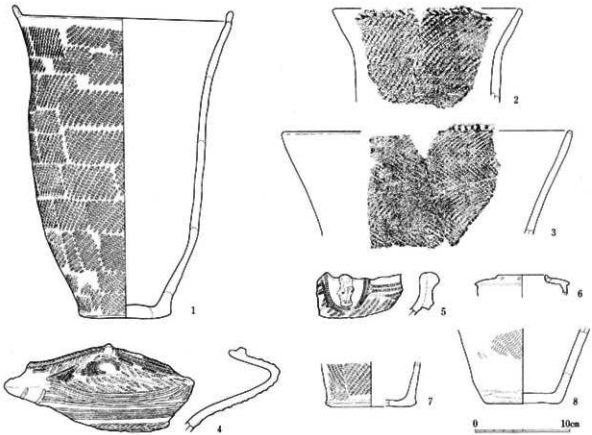


図16　第３号住居址出土土器実測図（１：４）

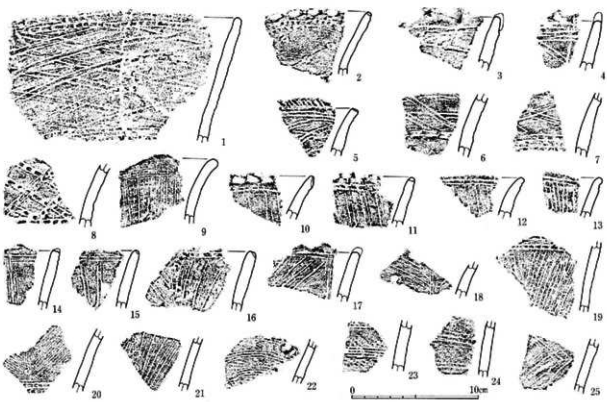


図17　第３号住居址出土土器拓影①（１：３）

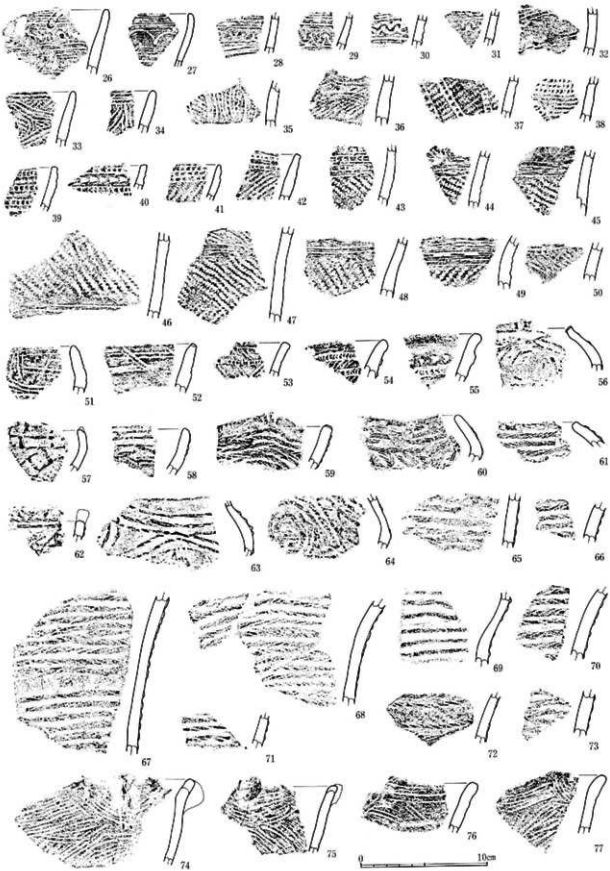


図18　第３号住居址出土土器拓影②（１：３）

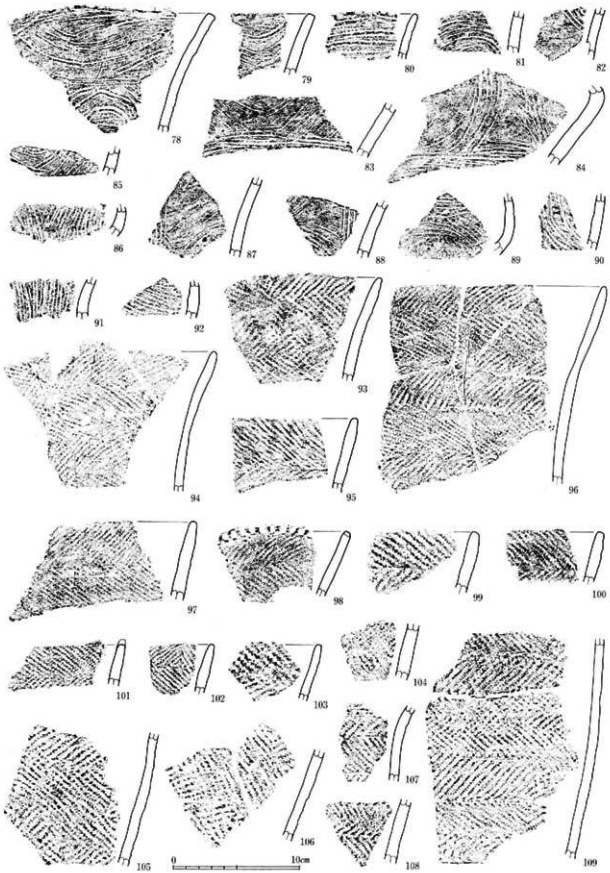


図19　第３号住居址出土土器拓影③（１：３）

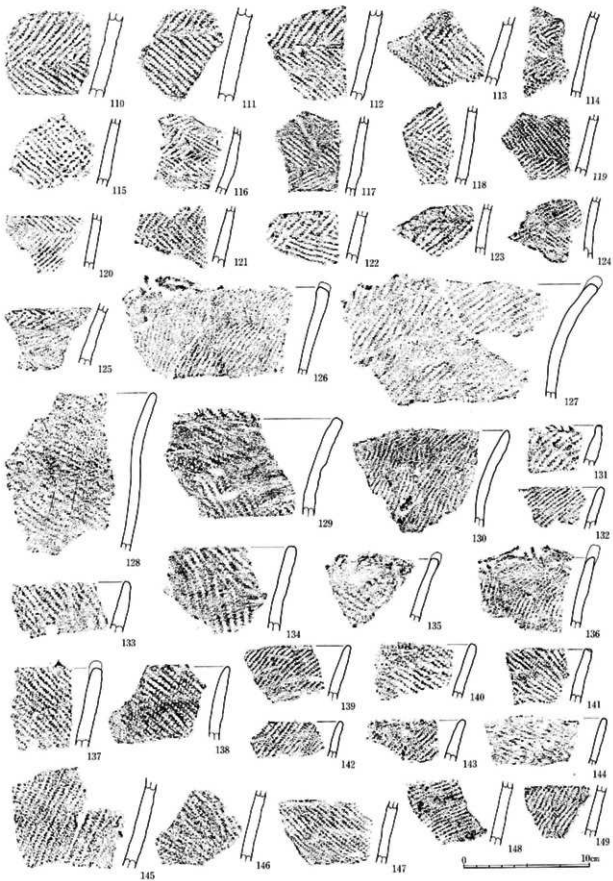


図20　第３号住居址出土土器拓影④（１：３）

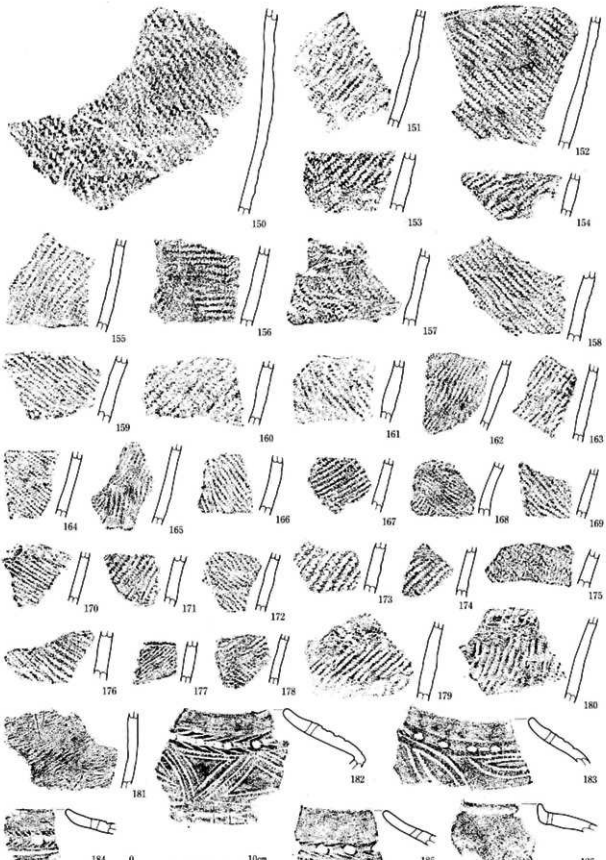


図21　第３号住居址出土土器拓影⑤（１：３）

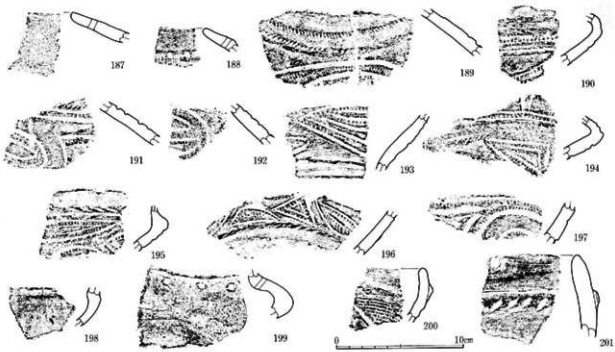


図22　第３号住居址出土土器拓影⑥（１：３）

第４号住居址（図23・24）

調査地北西にて検出したもので、大半が調査区外となり詳細は不明である。平面プランは隅丸方形の可能性が高い。確認面からの掘り込みは平均15cm前後と浅く緩やかなものである。床面は下層の礫層を掘り込んでおり不明瞭なものであった。柱穴等その他の施設は確認されていない。また、本遺構を住居址とする積極的な根拠はない。

出土土器の様相から、縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と考えられる。

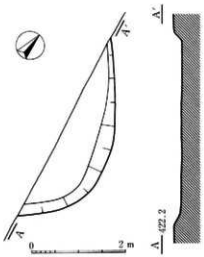


図23　第４号住居址実測図（１：80）

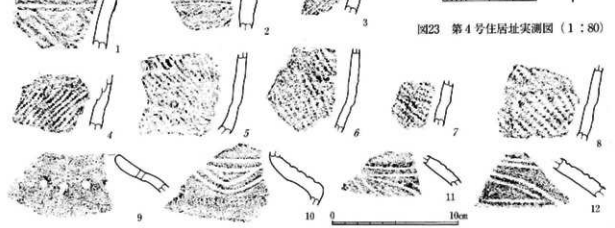


図24　第４号住居址出土土器拓影（１：３）

第５号住居址（図25～31）

調査区北西にて検出された住居址で、第１号住居址を切って構築される。また、調査の進行過程で、下層に第６号住居址を確認したが、第６号住居址との先後関係は明らかにし得なかった。

平面プランは8.20×7.60mの大型のやや不整な隅丸方形を呈する。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深くしっかりしたものである。住居址中央部分が第６号住居址と重複するために詳細は不明な部分が多いが、壁際にP_1～P_3・P_5・P_8・P_9といった、主柱穴と思われる掘り込み規模のしっかりした柱穴が検出されている。P_6は径1.40m・深さ60cmの大規模な掘り込みで、内部より浅鉢（図26－２）が出土している。

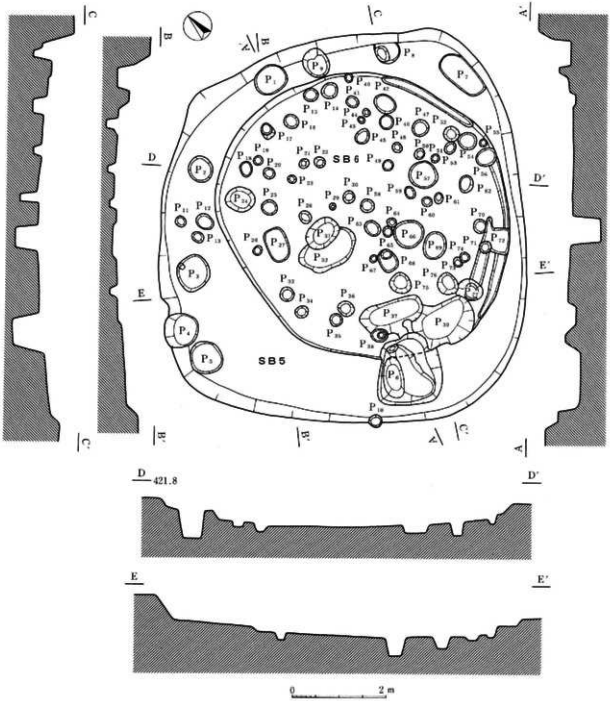


図25　第５号(外)・第６号(内)住居址実測図（１：80）

第５号(外)・第６号(内)住居址

床面は軟弱であるが、比較的明瞭なものであった。炉等は確認されていない。

覆土下層から床面直上にかけて、玦状耳飾破片１点・小玉１点・石匙７点・打製石鏃５点・石錐２点・磨製石斧１点等が出土している。また図示した土器も大半が覆土内より出土したものである。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と考えられる。

P_6土器出土状況

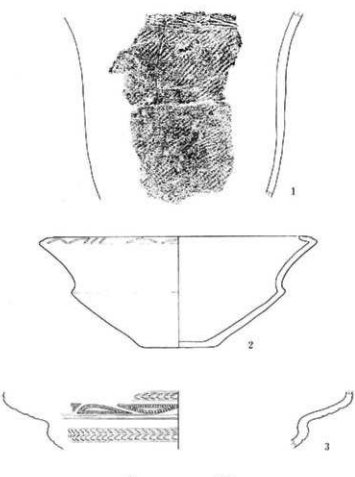


図26　第５号住居址出土土器実測図（１：４）

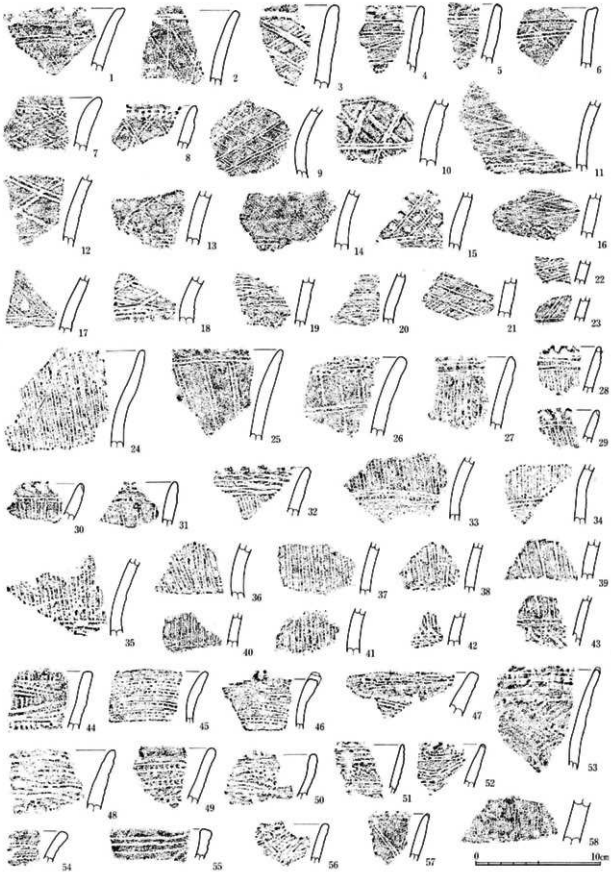


図27　第５号住居址出土土器拓影①（１：３）

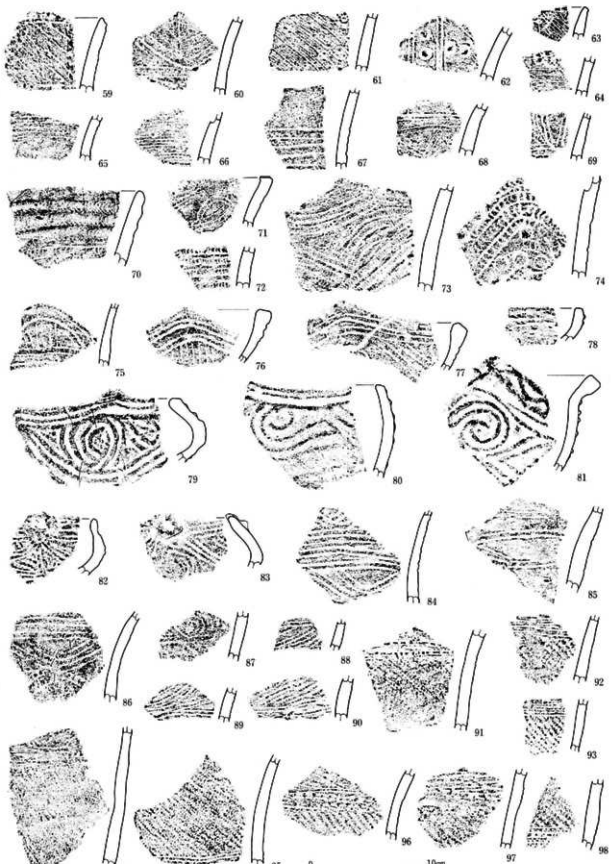


図28　第５号住居址出土土器拓影②（１：３）

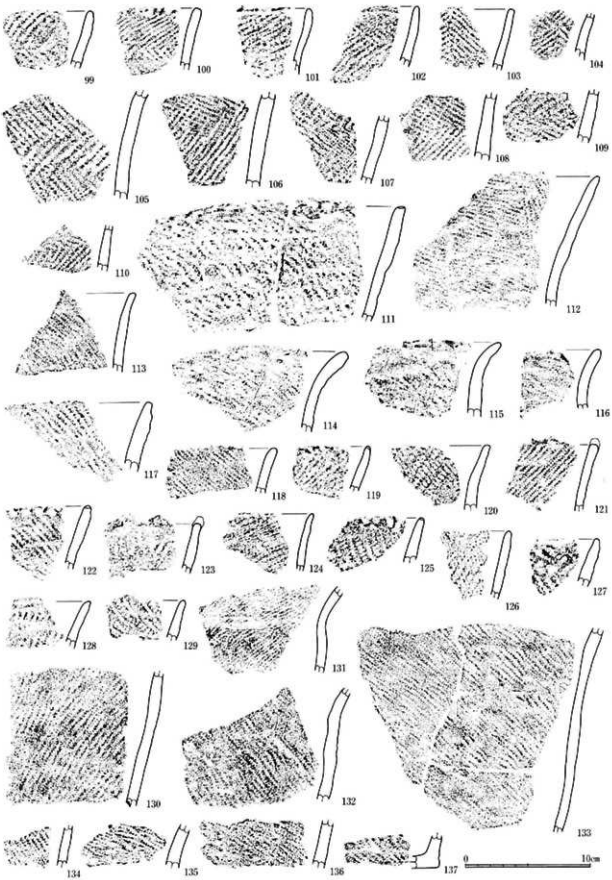


図29　第５号住居址出土土器拓影③（１：３）

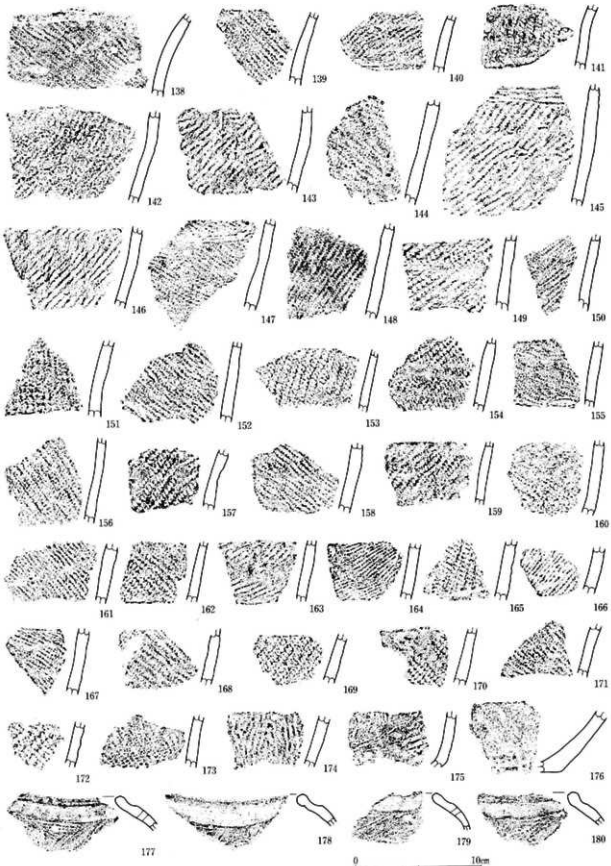


図30　第５号住居址出土土器拓影④（１：３）

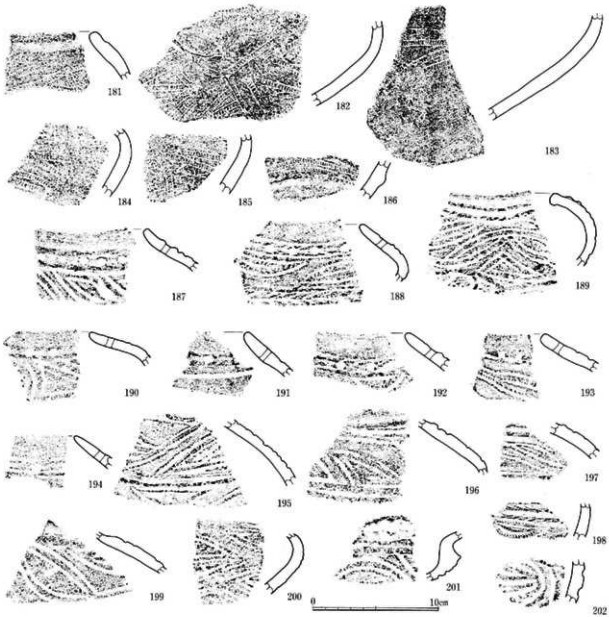


図31　第５号住居址出土土器拓影③（１：３）

第６号住居址（図32～37）

調査区北西にて検出したもので、第５号住居址と重複するが、第５号住居址の調査過程で確認したもので、先後関係は不明である。

平面プランが6.20×5.90mほどのやや不整な円形住居址である。掘り込みは第５号住居址の床面より平均15cm前後の深さがある。床面は全体に軟弱であるが、比較的明瞭なものであった。P_{15}～P_{77}までの非常に多数のピットを検出しているが、明確な主柱穴配置は不明である。P_{31}・P_{32}・P_{37}・P_{39}などの規模の大きなものは第５号住居址に伴うものである可能性が高い。東から南にかけての壁際に、深さ10cm前後の壁周溝を検出しているが全周しない。住居址中央付近の床面上に炭化物の堆積を確認しているが、明確に炉址と把握しうるものではなかった。

覆土下層から床面上にかけて、住居廃絶後に多量の円礫と土器が投棄されたような状況で検出されており、出土遺物の大半はこの中から出土している。特殊なものとして、玦状耳飾の破片３点と管玉２点が出土しており、

このほか、石匙４点・磨製石斧５点・石皿５点・打製石鏃２点等が出土している。出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と考えられる。

第６号住居址

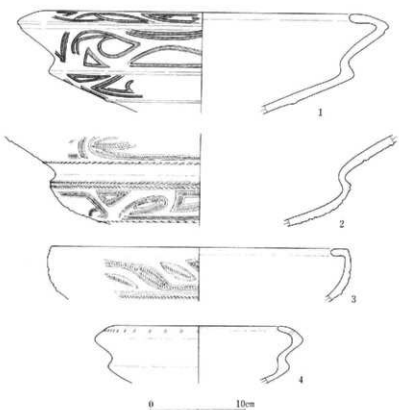


図32　第６号住居址出土土器実測図（１：４）

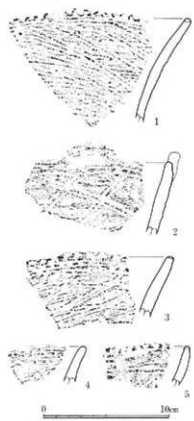


図33　第６号住居址出土土器
拓影①（１：３）

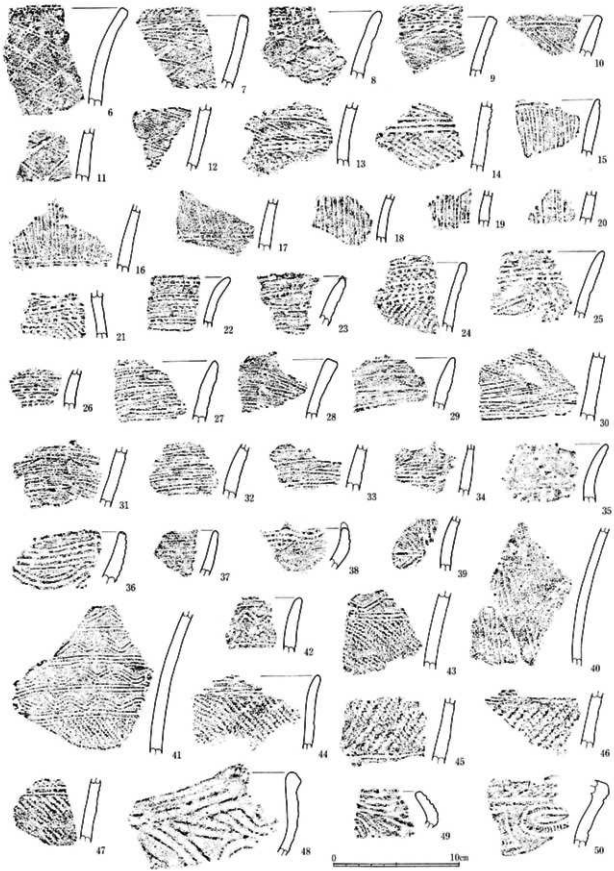


図34　第6号住居址出土土器拓影②（1：3）

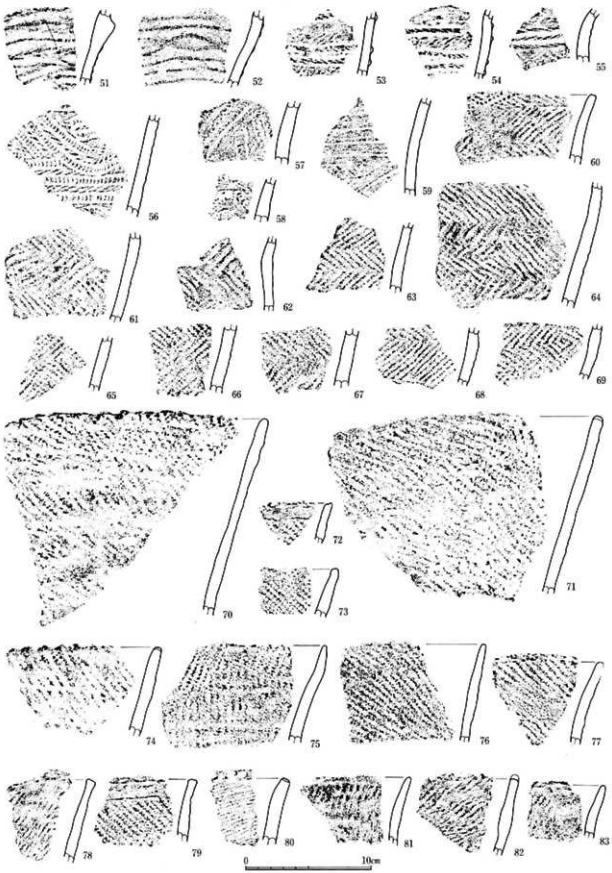


図35　第6号住居址出土土器拓影③（1：3）

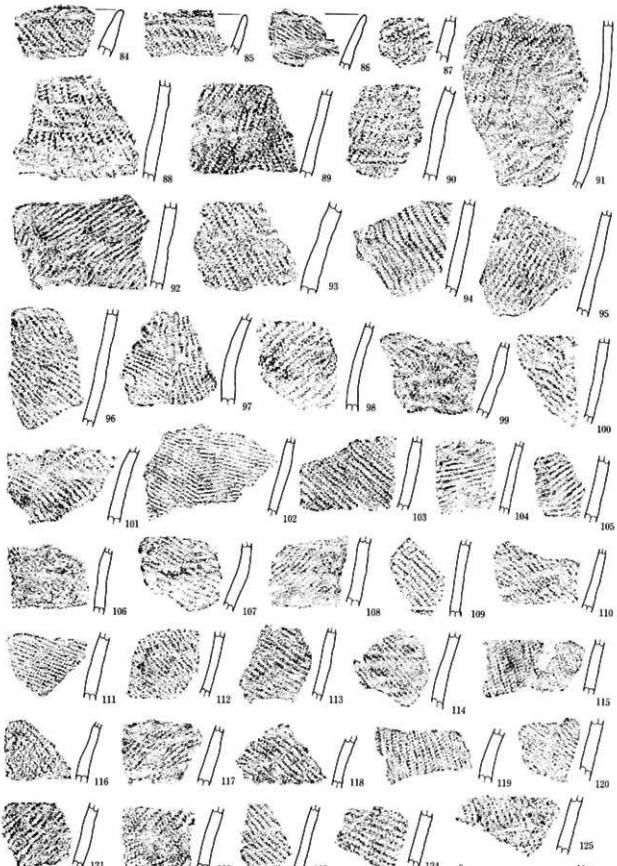


図36　第６号住居址出土土器拓影④（１：３）

図37　第６号住居址出土土器拓影③（１：３）

第７号住居址（図38～43）

調査区南端にて検出された住居址で、今回の調査で検出された住居址群の中でも最も南側に位置する住居址である。他遺構との切り合い関係はない。

平面プランは長軸7.20m・短軸6.60mほどのやや不整な円形を呈するが、床面にて確認された周溝が方形にめぐる点を考慮するならば、隅丸方形住居とするほうが妥当であるかも知れない。壁の立ち上がりはかなり緩やかであるが、確認面からの掘り込みは平均40cm前後と深くしっかりしたものである。柱穴はＰ１～Ｐ30まで多数が検出されているが、主柱穴はＰ１～Ｐ15までの内の円形配列と予想される。炉は住居址中央やや南よりのところに位置し、深さ５cmほどの地床炉である。炉床は焼土ならびに炭化物の堆積が確認されているが、さほど焼き締まった状況ではなかった。Ｐ28～Ｐ30は炉に伴う何らかの施設である可能性もある。北壁から西壁にかけて深さ10cmほどの壁周溝が、方形に断続的に検出されているが全周はしない。床面は周溝内、特に地床炉周辺を中心に固く締まった部分が認められたが、全体には不明瞭なものであった。

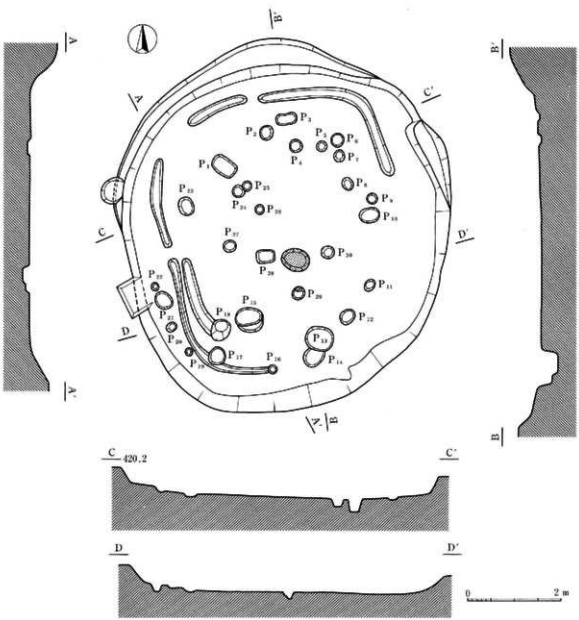
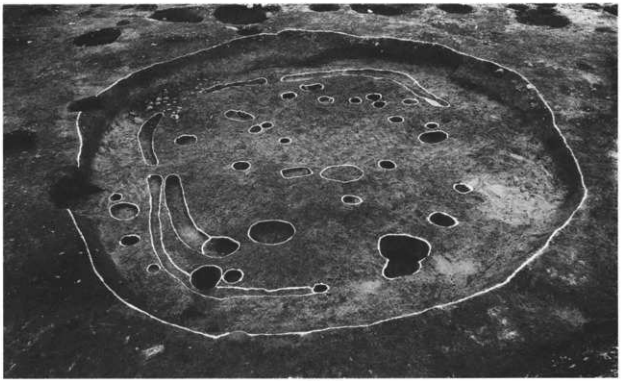


図38　第７号住居址実測図（１：80）

覆土上層より玦状耳飾破片１点・管玉１点、覆土下層より石匙４点・打製石鏃６点・石錐２点・石皿２点が出土している。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と考えられる。



第７号住居址

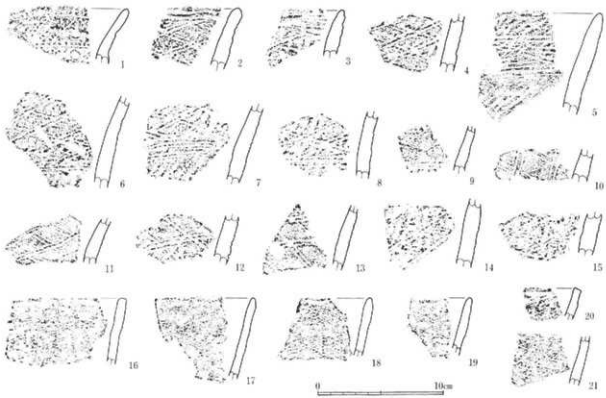


図39　第７号住居址出土土器拓影①（１：３）

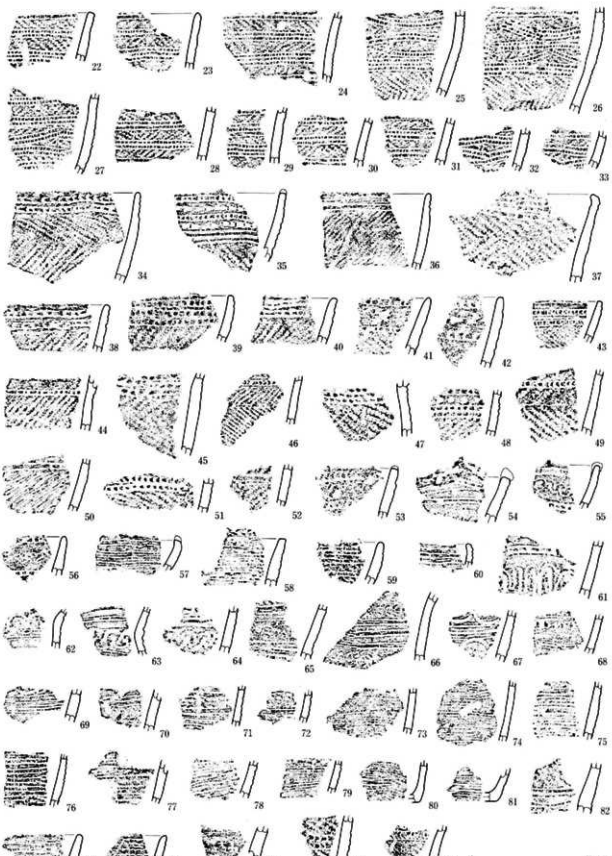


図40　第７号住居址出土土器拓影②（１：３）

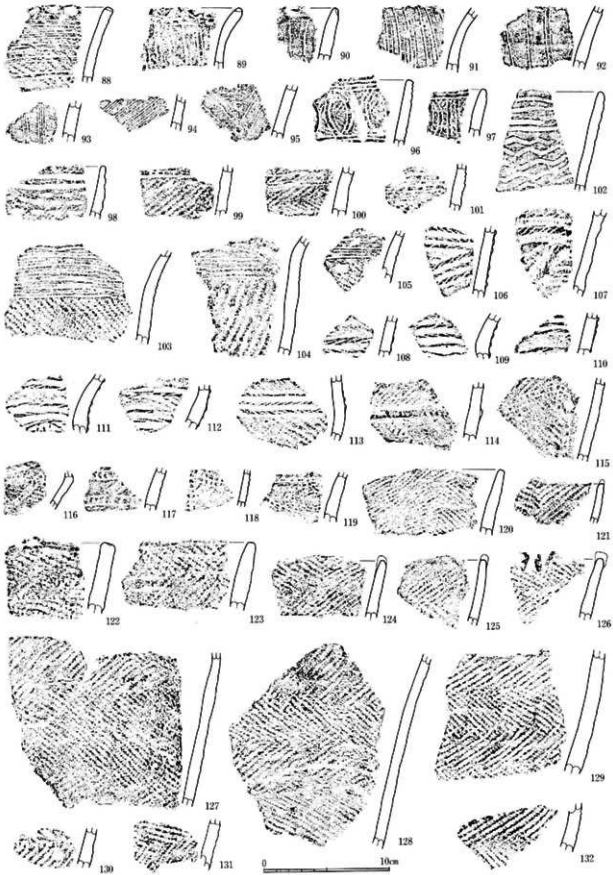


図41　第７号住居址出土土器拓影③（１：３）

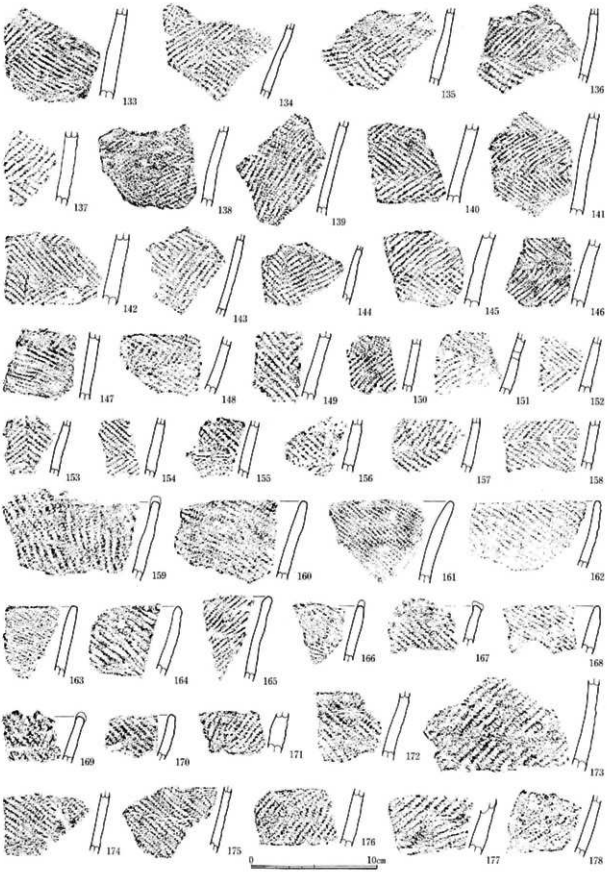


図42　第７号住居址出土土器拓影④（１：３）

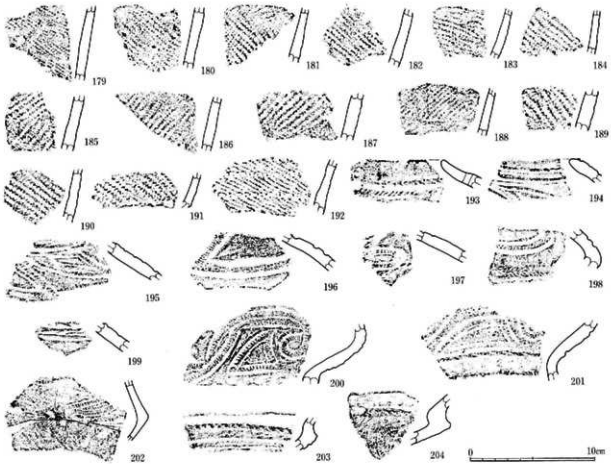


図43　第７号住居址出土土器拓影⑤（１：３）

第８号住居址（図44・45）

調査区南側にて検出したもので43号土壙と重複する。平面プランは4.80×4.60mの非常に不整な隅丸方形を呈する。壁の掘り込みは北側は急だが南側は緩やかなもので、深さは平均50cm前後と深い。床面は下層の礫層を掘り込んでおり非常に不明瞭なものであった。柱穴はP_1～P_{13}まで検出しているが主柱穴配置は不明である。本遺構を住居址とする積極的根拠はない。覆土内より石匙２点・打製石鏃３点・打製石斧１点・石皿１点が出土している。出土土器より縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と考えられる。

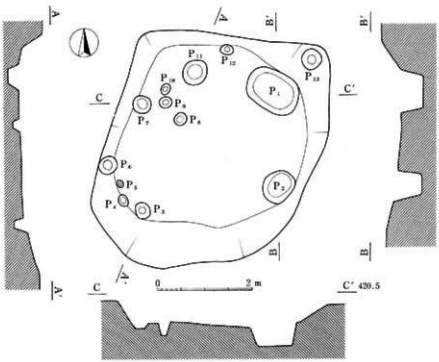


図44　第８号住居址実測図（１：80）

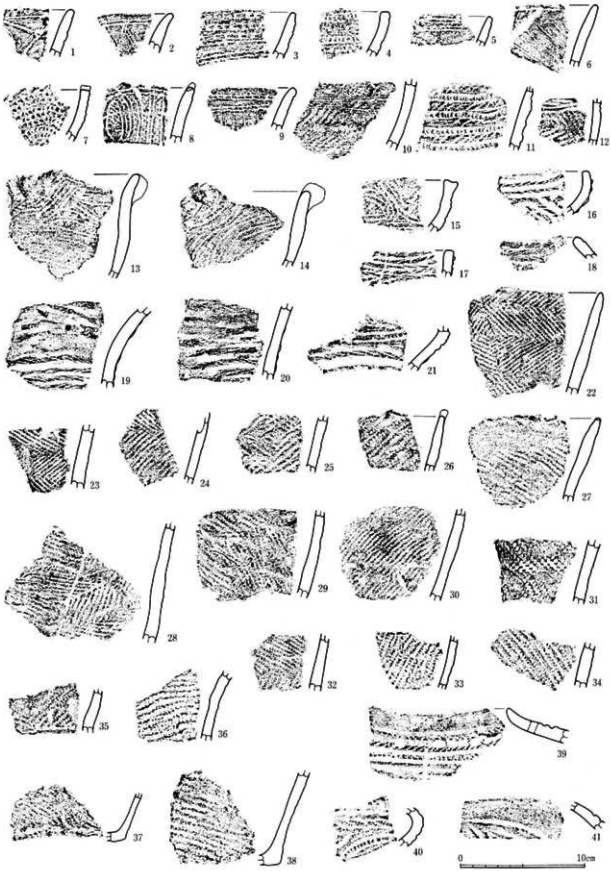


図45　第８号住居址出土土器拓影（１：３）

第９号住居址（図46～48）

調査区南側にて検出されたもので、他遺構との切り合い関係はない。

敷石住居址で、掘り方上面のプランは2.90×2.70mほどのやや不整な隅丸方形を呈するが、床面の敷石の配置状況より判断すれば、2.60×2.40mほどの隅丸方形プランと想定される。確認面からの掘り込みは北西壁で20cm前後・南東壁で15cm前後を測る。

床面の敷石は扁平な河原石を利用したもので、隙間と壁際には小円礫を詰め込んでいる。北西から南にかけては良好な遺存状況を示していたが、北東部分は石が抜き取られていた。

炉は石囲炉で、住居址中央やや南側に位置する。内部にはほぼ完形となる深鉢（図47－１）が、破砕して敷きつめられた状況で検出されている。炉の内部からは焼土や炭化物等がほとんど検出されておらず、頻繁に使用されたものとは考えられない。南壁下ほぼ中央に埋甕（２）が存在する。口縁部を住居址内側に傾けて、斜めに埋置した状況で検出された。

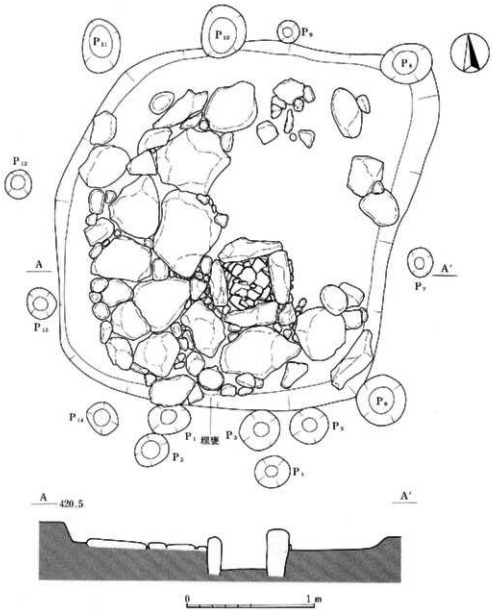
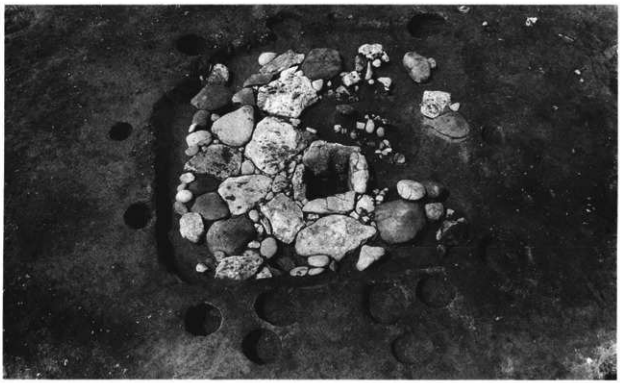
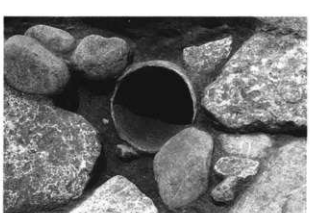


図46　第９号住居址実測図（１：30）



第9号住居址

石囲炉



埋　甕

本住居址を取り囲む様に、P_1～P_{14}のピットが検出されている。比較的等間隔に規則正しく配列されており、本住居址に伴う柱穴である可能性が高い。特にP_1～P_4は埋甕の位置を考慮するならば出入り口施設に関連するものである可能性が非常に高いだろう。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代中期末葉の所産ととらえられる。

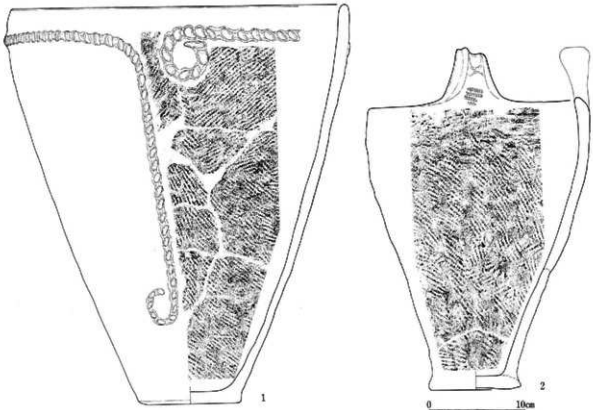


図47　第９号住居址出土土器実測図（１：４）

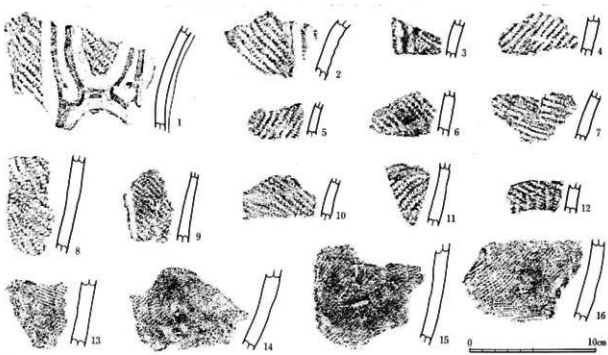


図48　第９号住居址出土土器拓影（１：３）

第10号住居址（図49～57）

調査区南側にて検出された住居址で、第12号住居址と重複するが、先後関係は明らかではない。

平面プランは8.90×8.00mのやや不整な円形を呈する。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深い。壁は全体に緩やかな立ち上がりを見せるが、北西と南西側の壁は中位に狭いテラスを有し、二段にわたる掘り込みとなる。

床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。柱穴はP_1～P_{17}まで検出されているが、主柱穴はP_1～P_7のやや不整な円形配列と想定される。炉等その他の施設は確認されていない。

住居址南東壁際の覆土上層～中層にかけて、多量の円礫と土器が住居廃絶後に一括投棄された状況で出土しており、図化した土器の大半はこの中より出土したものである。

このほか玦状耳飾破片３点・垂玉１点・打製石鏃９点・磨製石斧２点・打製石斧１点・石匙13点・石錐３点・石皿４点等が出土している。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と考えられる。

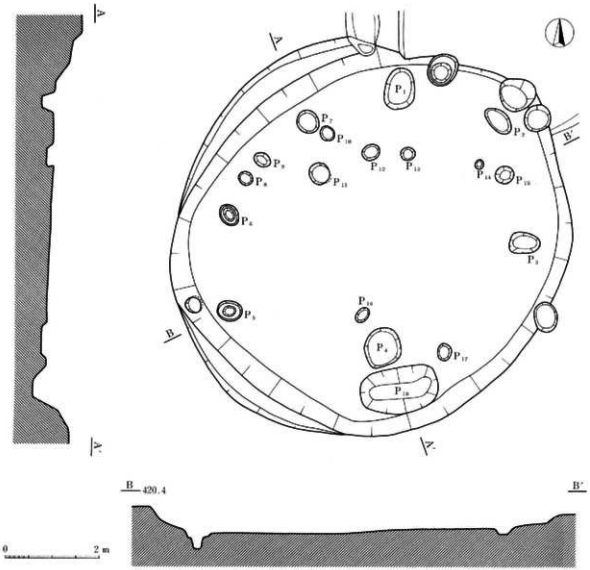
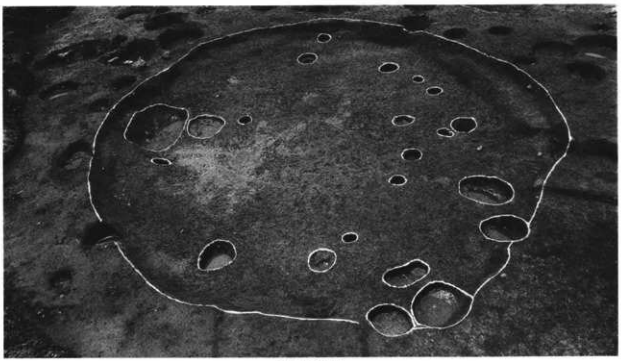


図49　第10号住居址実測図（１：30）



第10号住居址

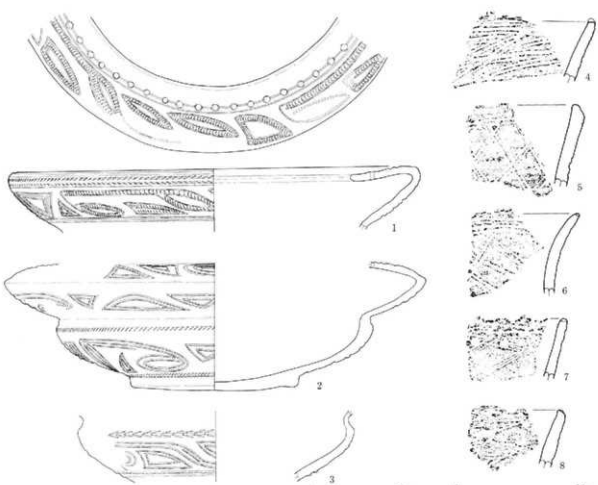


図50　第10号住居址出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影①（1：3）

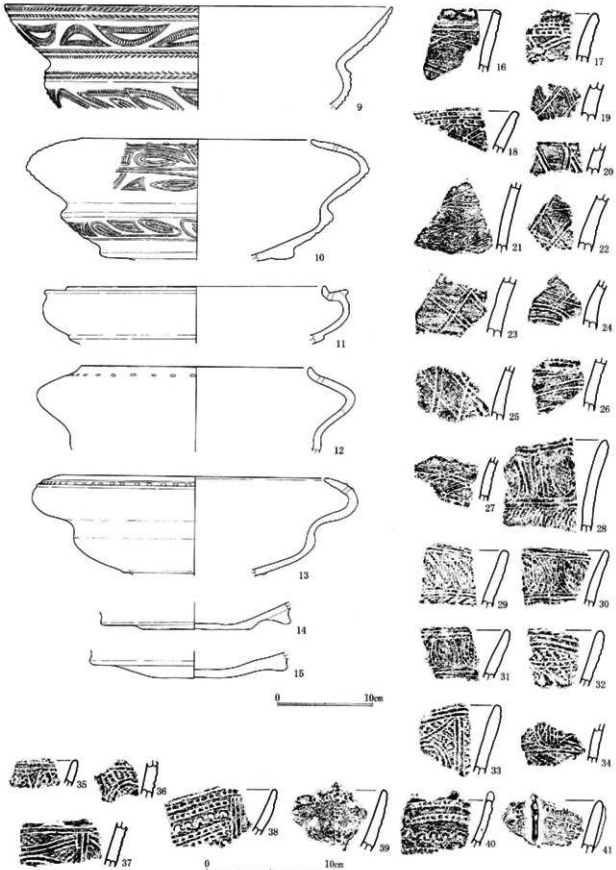


図51　第10号住居址出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影②（1：3）

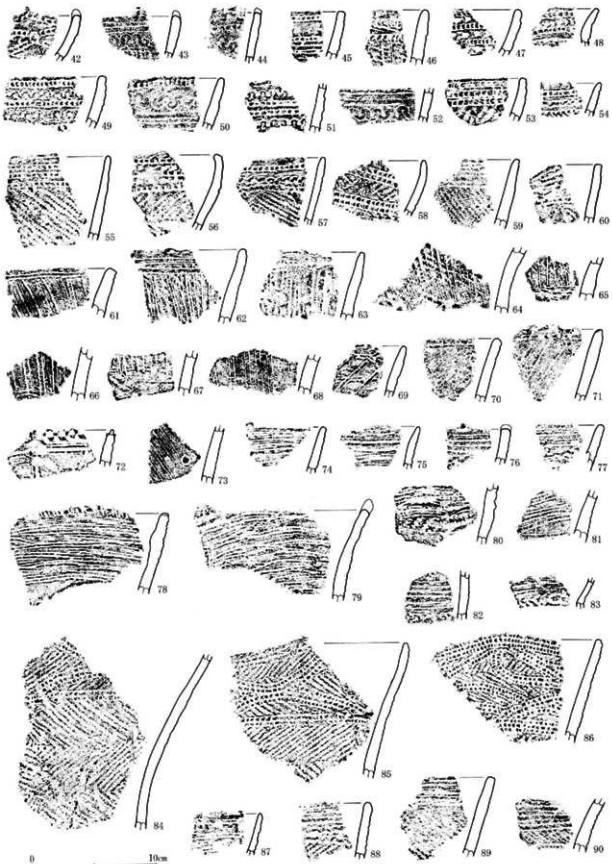


図52　第10号住居址出土土器拓影③（1：3）

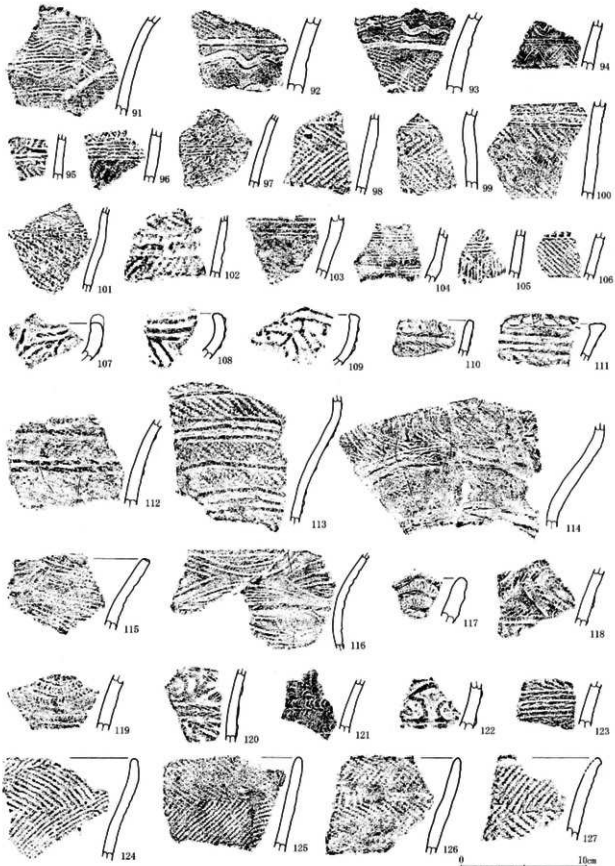


図53　第10号住居址出土土器拓影④（1：3）

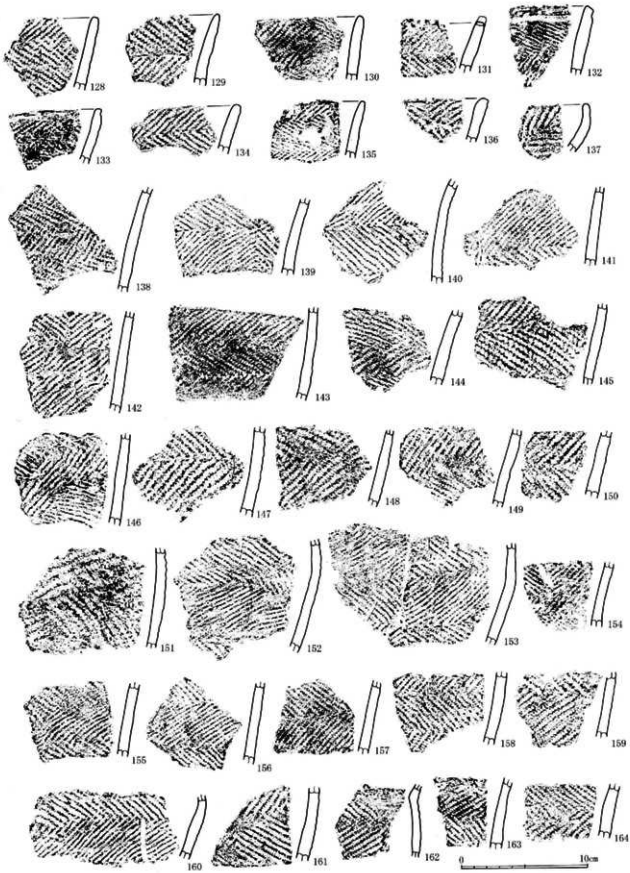


図54　第10号住居址出土土器拓影⑤（1：3）

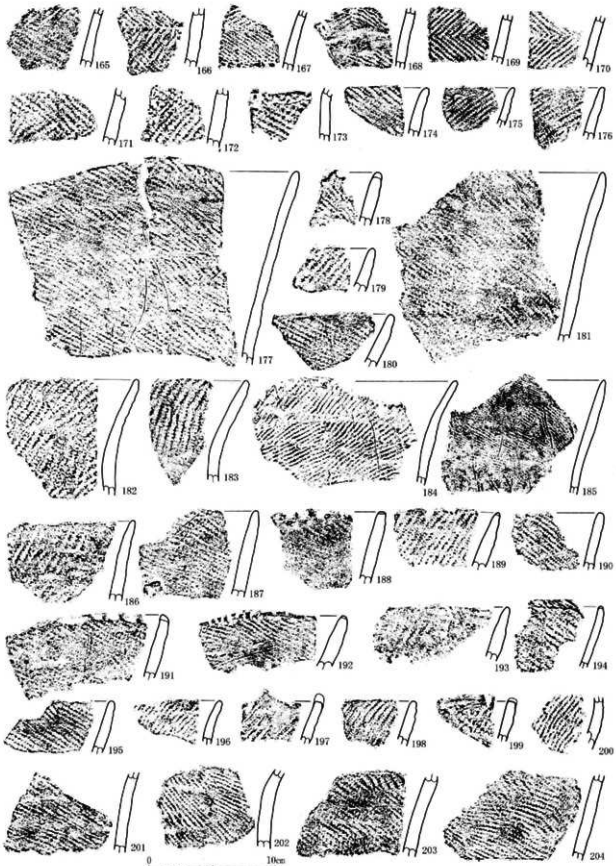


図55　第10号住居址出土土器拓影⑥（1：3）

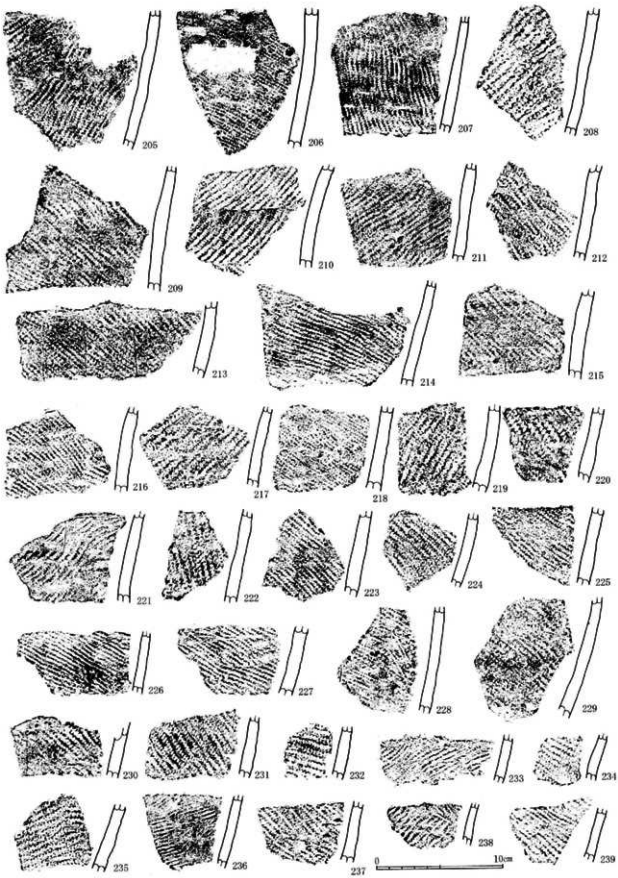


図56　第10号住居址出土土器拓影⑦（1：3）

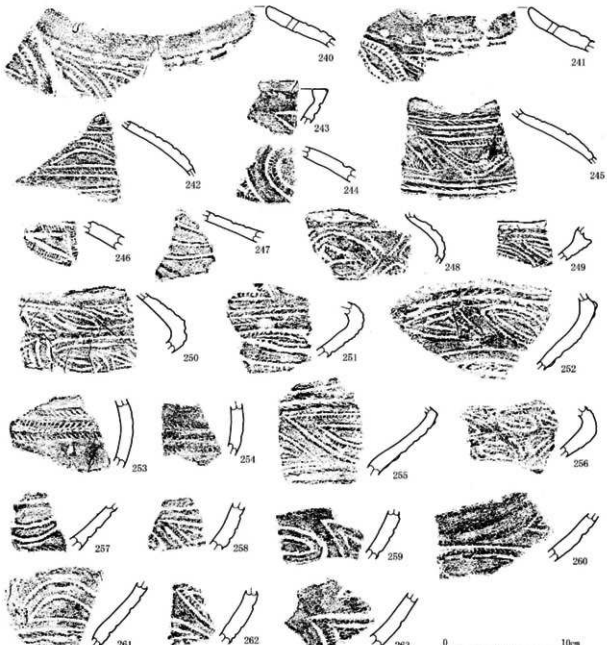


図57　第10号住居址出土土器拓影⑧（1：3）

第11号住居址（図58～63）

調査区南側にて検出されたもので、第41号土壙に西側上層を切られる。平面プランは9.40×7.40mの不整な長円形を呈する。壁は全体に非常に緩やかに立ち上がるが、中央付近は深く、確認面からの掘り込みは40cm前後を測る。床面は特に南東側が下層の礫層を掘り込んでおり、非常に不明瞭なものであった。柱穴はP_1～P_{11}まで検出されているが、主柱穴はP_1～P_8のやや不整な円形配列となろう。炉等その他の施設は確認されていない。

南東側の覆土上層～中層にかけて、多量の円礫と土器が住居廃絶後に投棄されたような状況で出土しており、図化した土器の大半がこの中より出土している。このほか、玦状耳飾破片1点・管玉1点・打製石鏃15点・石匙8点・石錐1点・磨製石斧2点・打製石斧1点・石皿6点等が出土している。

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯b式期の所産と考えられる。

第11号住居址

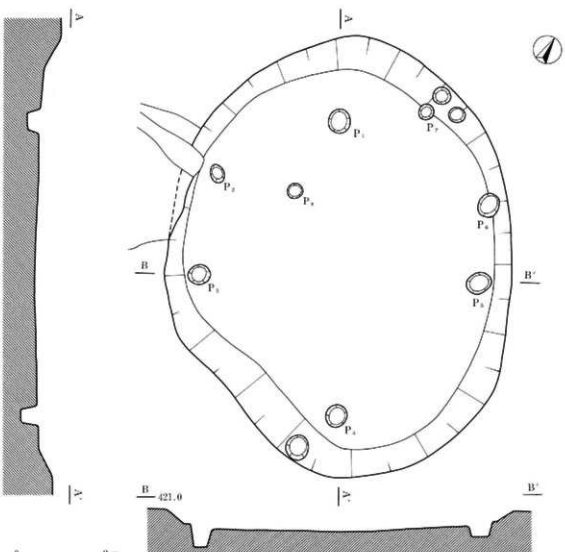


図58　第11号住居址実測図（1：80）

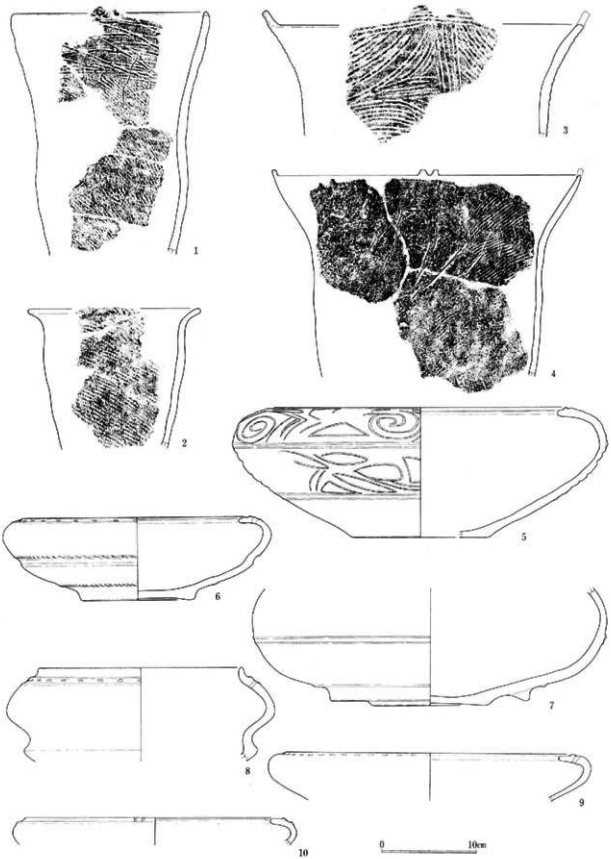


図59　第11号住居址出土土器実測図（1：4）

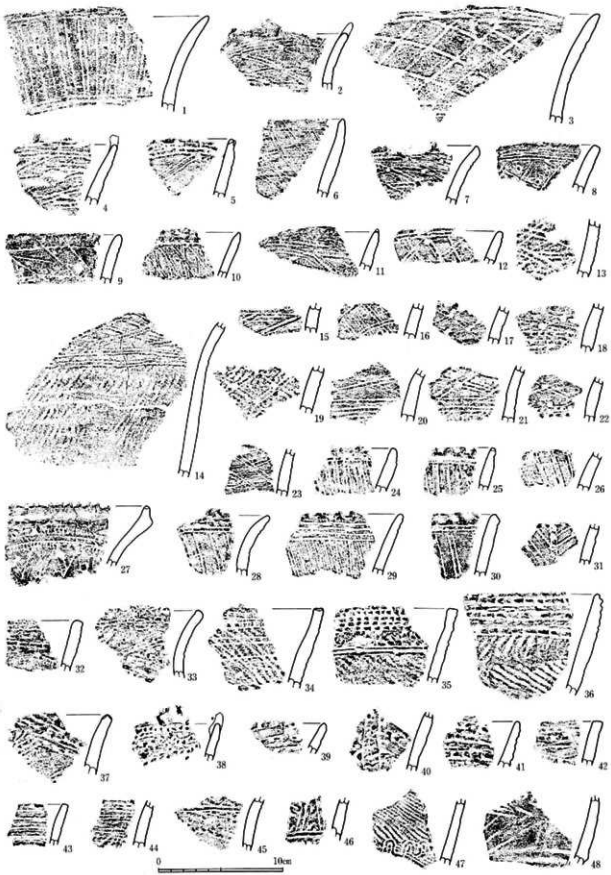


図60　第11号住居址出土土器拓影①（1：3）

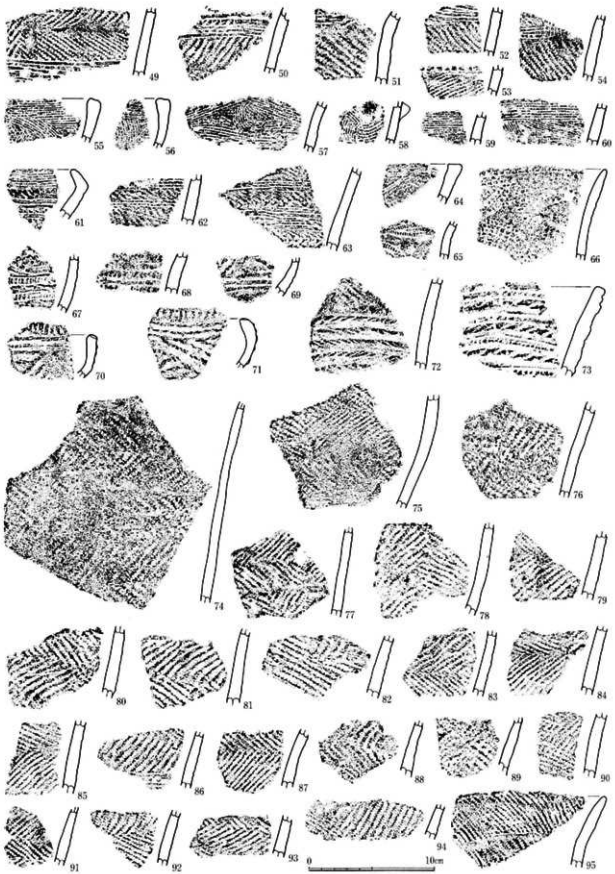


図61　第11号住居址出土土器拓影②（1：3）

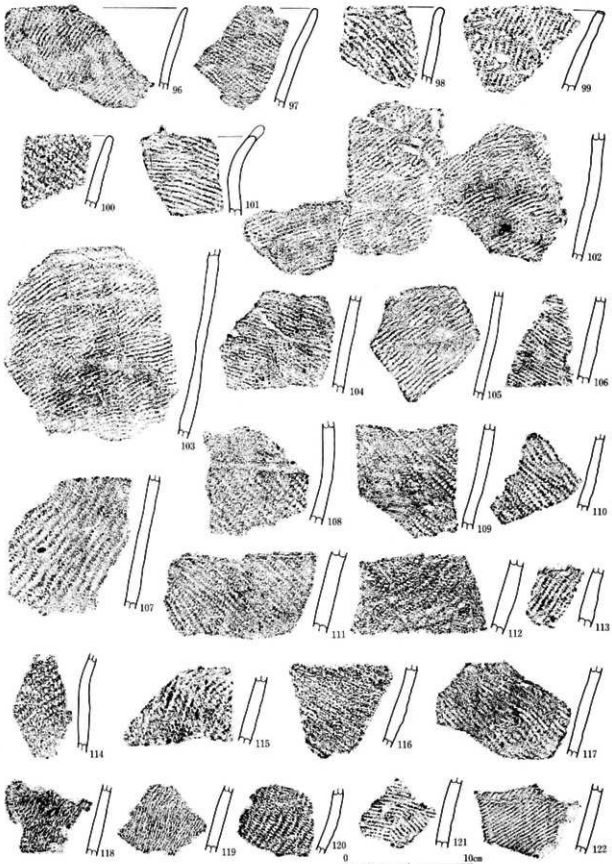


図62　第11号住居址出土土器拓影③（1：3）

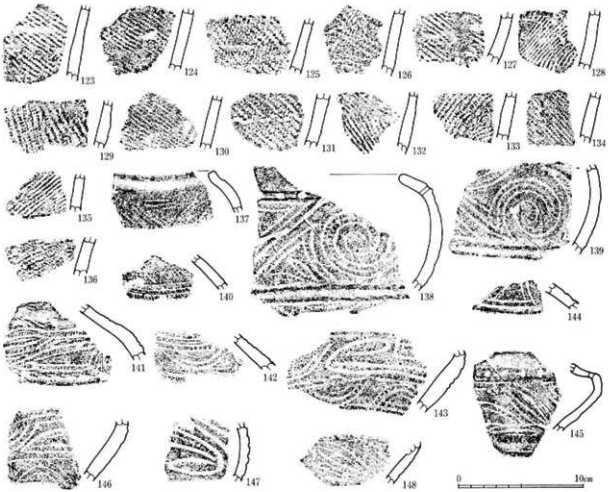


図63　第11号住居址出土土器拓影④（1：3）

第10号・12号住居址

第12号住居址（図64～66）

調査区南側で検出された住居址で、東側は1/4ほどが調査区外となる。また、南側は第10号住居址と重複するが先後関係は不明である。

平面プランは径5.00mほどの円形を呈する。確認面からの掘り込みは比較的浅く平均20cm前後を測る。壁は全体的にかなり緩やかな立ち上がりを見せる。

床面は全体に軟弱ではあるが、比較的明瞭で、住居址中央付近を中心にわずかではあるが締まった部分が認められた。

柱穴はP_1～P_{15}まで検出しているが掘り込みのしっかりしたものはP_3・P_4・P_6のみで、明確な主柱穴配置は不明である。炉等その他の施設は確認されていない。打製石鏃10点・石錐4点・石匙1点・磨製石斧1点・石皿3点等が出土している。

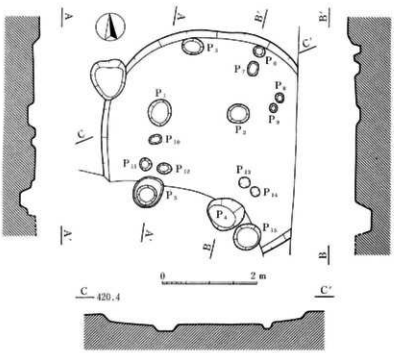
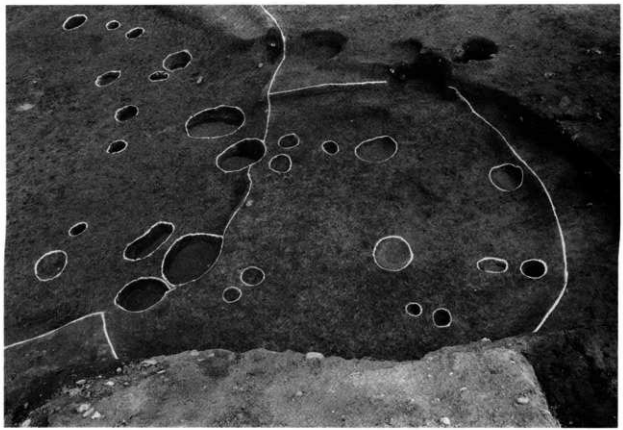


図64　第12号住居址実測図（1：80）

出土土器の様相より、本住居址は縄文時代前期後半諸磯b式期の所産と考えられる。



第12号住居址

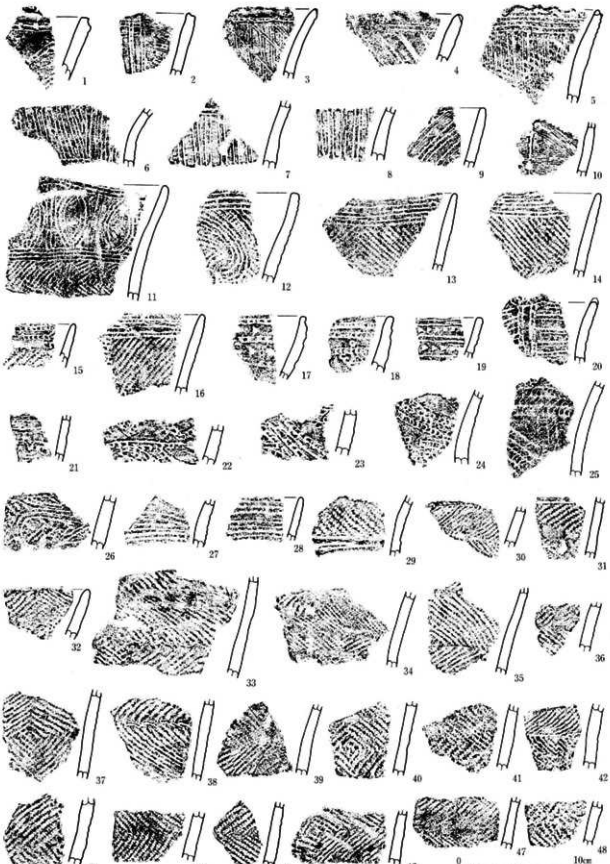


図65　第12号住居址出土土器拓影①（1：3）

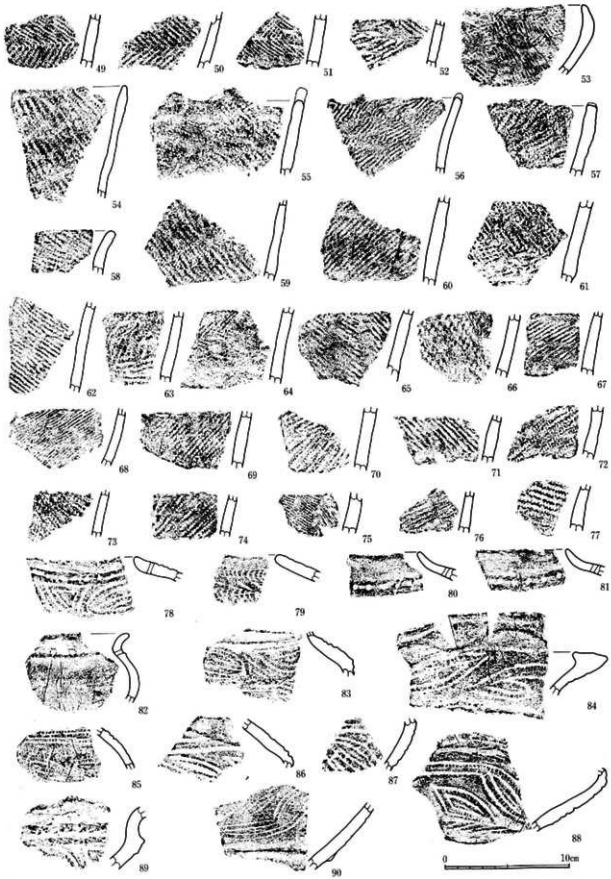


図66　第12号住居址出土土器拓影②（1：3）

第13号住居址（図67～70）

調査区南側にて検出された住居址で、東側は1/3以上が調査区外となる。また、南側を第12号住居址に切られる。

規模等詳細は不明であるが、平面プランは径5.20mほどの円形住居址と考えられる。

確認面からの掘り込みは平均30cm前後であるが、床面は壁際が高く中央付近が深くなり、緩やかなすり鉢状を呈する。壁の立ち上がりもかなり緩やかである。

床面は全体に軟弱ではあるが、比較的明瞭なものであった。柱穴はP_1～P_{23}まで検出されている。明確な主柱穴配置は不明であるが円形配置が予想される。

炉等その他の施設は確認されていない。

遺物は土器のほかに打製石鏃９点・石匙２点・石錐２点・磨製石斧１点・石皿１点・砥石１点等が出土している。

出土土器の様相より縄文時代前期後半諸磯ｂ式期の所産と考えられる。

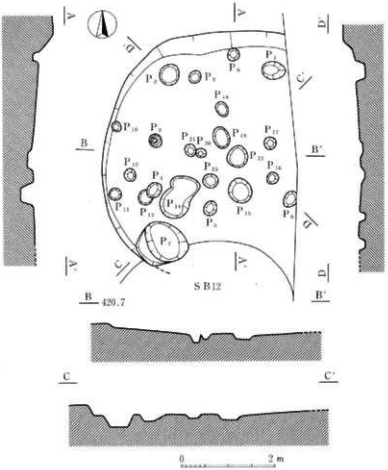
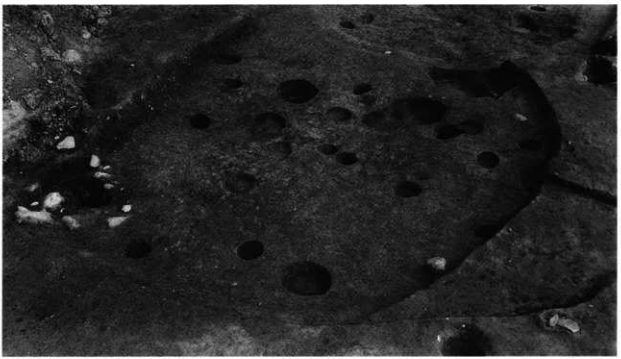


図67　第13号住居址実測図（１：80）



第13号住居址

第13号住居址遺物出土状況

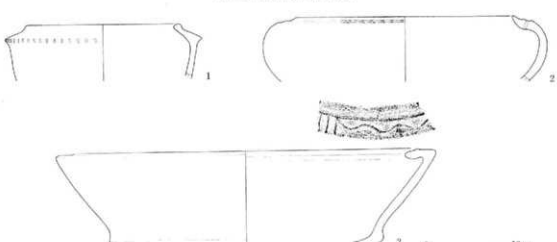


図68　第13号住居址出土土器実測図（1：4）